IS シャルロットにおまかせ♪

JK LOVER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　シャルロットにおまかせ♪

【Ｎコード】
Ｎ６４１５Ｗ

【作者名】
ＪＫ　ＬＯＶＥＲ

【あらすじ】
◇父の会社の経営危機を救うためＩＳ学園に入学したシャルル・デュノア。
そんな彼には人に言えない秘密があった。彼はなんと『名前』と『性別』を偽っていたのだ。
学園で再会する幼なじみと新たに仲良くなる個性的な友達。果たして彼女はその秘密を無事隠しきりながら学園を卒業出来るのだろうか？
テーマは『友情』です。

※キャラ設定が多々違います。

性格や言葉使いはあまりいじらないように心がけます（セシリアのみキャラ崩壊済）。

織斑一夏はＩＳ学園に通っていません。

オリキャラ出ます。

俺にはエロギャグ路線に走る傾向があるので、そのあたりはお許しください。

プロローグ（前書き）

この物語はシャルロットにささげるシャルロットのためのシャルロットだけのシャルロットによるシャルロットなのです。

自分で書いてて意味わからん（笑）
要するに俺達はみんなシャルロッ党ってことですね。

プロローグ

◇『ＩＳ』

それは無限の可能性。

正式名称『インフィニット・ストラトス』。
宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。
しかし「制作者」の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は「兵器」へと変わった。だが今は各国の思惑から「スポーツ」にと落ち着いた。いわゆる、飛行パワースーツのことだ。
しかしこの『ＩＳ』には致命的な欠点があった。
そう、これは女にしか使えない。反応しないのだ。

これは、そんな『ＩＳ』を起動することのできる１人の男（？）の物語である。

オリサブキャラ紹介（前書き）

俺ってネーミングセンスねぇ～

まあ、サブキャラなんで多分使い捨てです。

彼女にはある力が…

本編にはそのうち出てきます

オリサブキャラ紹介

◇オリジナル・サブキャラクター紹介

名前：鏡　鏡華
（かがみ　きょうか）

ＩＳ学園所属。クラスは３組だがクラス代表に選ばれるほどの実力の持ち主。
ただし専用機持ちではない。
容姿の特徴：髪型が内巻きショートヘアで綺麗な黒髪をしている。
あと身長が１４０センチしかなく小柄でそれをコンプレックスに思っている。

出身は大阪。
喋り方は関西弁。
一人称は『ウチ』

性格はどこにでもいそうな元気で活発で明るい女の子。
そんな彼女は学園内ではあることをきっかけに有名人。

なんと彼女は過去にＩＳ学園の訓連機を借りてそれを勝手にペンキで豹柄（ヒョウ）に塗装したのだ。
もちろん、そのことは先生（千冬）にバレてしまいこっぴどく怒られた。

そんなぶっ飛んでいて一見明るい彼女だが、中には悲しい過去もある。

彼女の両親は彼女が幼い頃に交通事故で亡くなった。
それを境に彼女は親戚の家をたらい回しにされた。

そんな彼女は人に嫌われたくない一心でいつしか人の顔色ばかりを伺うようになった。
そしてある『力』に目覚めた。

その『力』とは一体……？

※サブキャラなんで多分使い捨てです。
皆さんの反応がよければ、また使うかも（笑）

第1話　入学式だよ♪（前書き）

この作品は全国のシャルロッ党にささげます。

楽しんでいただけたら幸いです。

第1話　入学式だよ♪

◇―桜の花びらが空を舞う。

まるでそれは1年の始まりを告げているようだ。

今日は待ちに待った入学式。

僕の名前はシャルル・デュノア（偽名）

今日からＩＳ学園に通うことになった1年生。

そんな僕にはある2つの秘密がある。

1つは『名前』を偽っているということ。

そして、もう1つが……『性別』を偽っているということ。

そう、僕は『女の子』なんだ。

だけど男の子としてこの学園へ通うこととなった。これには他人に言えない理由がある。

僕の父は量産機ＩＳのシェアが世界第三位のデュノア社の社長をしている。そんなデュノア社だったが近年経営危機に陥った。主にデュノア社が開発に力をいれてきたのは第二世代型（リヴァイヴ）ＩＳ

しかし今は第三世代型開発が主流で急務。もはや第二世代型は時代遅れ。

だが、今さら第三世代型を開発するにもデータ，予算，時間，などの全てが足りない。

そもそもＩＳ開発には莫大な予算と時間が必要で企業は国からの支援金がいる。
そんなＩＳを今さら一から創れるワケがない。
そのせいで国からの支援金が大幅に削られた。
このままでは援助は全面カット、その上でＩＳ開発許可さえ剥奪されてしまう流れとなった。

そんな状況を打破すべく僕が立ち上がった。
僕が学園で各国のＩＳデータを盗んでくる。それを素にすれば第三世代型ＩＳを開発することが出来るかもしれない。男装はデュノア社が注目を浴びるための宣伝。

何故そこまでするかって？

それはお父さんの役にたちたいから。

実は僕と今の父は本当の血縁ではない。
本当の両親はまだ僕が幼い頃、事故で亡くなった。
そんな僕を養子として引き取ってくれたのが今のお父さん。
その後、仕事が忙しいというのにいっぱい可愛がってくれた。

世話をしてくれた。

育ててくれた。

そんなお父さんに僕は恩を報いたい。

―教室。

何だかスゴく視線を感じる。いったい何だろう？
クラスの女の子全員が僕を見ているような…

そんなシャルルの疑問を無視してH・Rがすでに始まっていた。教壇に立っているのはにっこり微笑む女性副担任こと山田真耶先生。身長はやや低めで、かけている黒縁眼鏡が大きいのか若干ずれているのが特徴的。

「…デュノアくん」

「はい」

「えと、今自己紹介中でデュノアくんの番なんだけど次お願いできるかな？」

「はい」

僕は椅子からスッと立ち上がり自己紹介する。

「フランスから来たシャルル・デュノアです。咲き誇る花のような

皆さん方と1年間ご一緒出来るなんてとても光栄です。わからないこともあるかと思いますがよろしくお願いします」

「きゃあああ」

「美形！テレビで見たよりずっと」

「ああ、目眩しちゃう」

何故か騒ぎ出す女の子達。
それに首を傾げる僕。

「うるさいぞ！馬鹿者。静かにしろ」

そこへ怒鳴り声をあげる先生。
この人は担任の織斑　千冬先生。
たしか第一世代型ＩＳ操縦者の元日本代表選手。だが突如として引退し今は教師をしているらしい。

「きゃああ千冬様。本物の千冬様よ」

「千冬様。ずっとファンでした。」

「お姉様～好きです」

織斑先生はかなり鬱陶しそうな顔をして「やかましい」の一言でクラスの皆を黙らせる。

僕の織斑先生の第一印象はとにかくよく怒鳴るって感じ。

その後も自己紹介は続いた。

今は先程のＨ・Ｒと１時間目が終わって休み時間。けれど、この教室内の雰囲気に僕は落ち着かない。みんな僕のことをずっと見ている。

被害妄想とかじゃないよ。

ちなみに僕のことはフランスで裏工作してもらい『世界で唯一ＩＳを使える男』として発表された。その後、それは世界的にもニュースになっていて当然学園関係者から在校生までみんな僕のことを知っている。

だからＩＳを使える男の子の僕がみんな珍しくて見ているんだ。本当は女の子なんだけどね。身体検査とか普通あったんじゃないかって？

その辺は上手くごまかしたんだよ。

大人の事情ってやつでね……

「「デュノアくん」」

突然しびれを切らした大勢の女の子達が話しかけてきた。

それからは女の子達による質問攻めの嵐。

僕はきっと困り顔で答えていたんだろうね。

それを見かねたポニーテールの女の子が助けてくれた。

「おい、ちょっとこいつに用がある。借りるぞ」

その子はそう言うと僕の腕を掴みグイグイ引っ張って廊下の方へと連れていく。

第2話　幼なじみだよ♪（前書き）

方向性はこれであっているのでしょうか？誰かダメ出しプリーズ。

第2話　幼なじみだよ♪

◇僕の腕を掴んでいるこの子…どこかで見覚えがあるような……？

「さっきは困っているところ助けてくれてありがとう。あ、あれ？もしかして箒？」

「今さら気付いたのか」

僕の発言に箒はハァァ～と大きな溜め息をつき少し呆れたような表情を浮かべる。

そう、この子は僕の幼なじみで黒髪ポニーテールの似合う女の子。

名前は篠ノ之　箒

（しのの　ほうき）

お互いの家庭の事情により離ればなれになってしまった親友。

実は箒のお姉さんはあのＩＳの創立者にして天才発明家…篠ノ之束

（しのの　たばね）

この世にあるといわれている全４６７機のＩＳのコアと呼ばれる心臓を作り上げた天才。全てのＩＳはそのコアを元に作られているのだが束さんは突然製造を打ち切り行方不明になった。

そのＩＳが開発されるずっと前に僕らは出会っていた。数年前、僕は今の（義）父に連れられて日本にきたんだ。僕はそれを理由に日本の小学校に入学したものの日本語が話せなくいじめられてしまっ

た。
そんな僕を助けてくれたのが箒。
箒とはすぐに仲良しになった。
そして数年後に行われたＩＳの発表。
その後、束さんが失踪し政府からの身内の身柄保護という名目で箒は小学４年生の終わりに引っ越しを余儀なくされた。
偶然僕の方も父の仕事の事情でフランスへ帰国することとなった。
だからこうして会うのは６年ぶりぐらいかな。
「久しぶり、箒。大きくなったね。特にオッパイが…」
ギュッ
「痛い痛い痛いよ～箒。なんで頬をつねるの？」
「姉さんみたいな馬鹿なことをいうからだ。それより何故男のふりなどしている？それになぜ偽名を使う？」
「もう、相変わらず乱暴だな～。そのことはあとで説明するよ。ここじゃ人目につくし……」
チラッと周りを見ると複数の女の子達が聞き耳をたてている。
今の聞かれてないよね？
キーンコーンカーンコーン。
チャイムが鳴り授業開始を告げる。

僕らは急ぎ教室へと戻る。
授業が始まるがまだ授業でやっている内容は基礎中の基礎。本国で散々勉強した僕には復習にもならない。
それにしても箒ってば綺麗になったなぁ。でも相変わらず暴力的なところや目つきがキツいのは変わってないや。
つい、そんな事を考えてしまう。

―昼休み。
場所は食堂。

「箒は何食べる？」

「私はBランチだ」

「じゃあ僕もそれで」

箒は相変わらずのぶっきらぼう。
もうちょっと笑ってくれたっていいのに……

そういえば……
僕はふと思い出す。

「ねえ。去年、剣道の全国大会で優勝したんだよね？おめでとう」

「なんでそんなことを知っているんだ」

「えっ？だって新聞で見たし……」
「な、なんで新聞なんか見ているんだ」
あっ！テレてる。赤くなって可愛いな。
ちなみに新聞は日本からわざわざ取り寄せて読んでいた。
ちゃんと日本経済も勉強しておかないといけないからね。
食事を終えた僕達は残りの午後の授業を受ける。

―放課後。
ＩＳ学園は全寮制。
今日からこの部屋が僕の生活する場所。僕は山田先生から手渡された１０２５室のカギで扉を開ける。
ゴクリと息を飲む。
だが扉を開け目の前にいたのはまたもや『箒』。
僕は脱力する。
良かった。箒で。
だって知らない女の子だったら僕の秘密がバレかねないからね。
「お前が私の同室の者か。ま、まあ、悪くないな。幼なじみだ、積

もる話もあるだろうし楽にしろ」

嬉しいが照れくささから腕を組み偉そうにする箒。

箒ってばホントこういうところ変わってないなあ……

僕らは夜遅くに語りあった。
僕の父の会社のことやこの学園にきたワケ、僕の秘密。
箒からは姉の束さんのことや引っ越したその後など……

空白の6年間は僕らの仲に関係なかったのだろうか。
僕らは眠りにつくまで話をした。

第3話　怒った♪（前書き）

感想、意見お待ちしてます。
ダメ出しカモン。

第3話　怒った♪

◇今日もまぶしい朝日が昇る。

僕の名前はシャルル・デュノア（偽名）
改め本名シャルロット・デュノアです。
この学園には名前と性別を偽って通っています。
昨日幼なじみの箒にだけは全部話しちゃったけどね。そんなこんなで今日も朝を迎えました。

「おい、起きろ！起きろと言っている！」

いったい誰だろう？
誰かが僕の身体をゆさゆさと揺らす。僕は閉じていた目をゆっくりと少し開ける。そこには大きなスイカが２つ。とりあえずそれを両手で鷲掴みにした……ムニュムニュ

手には柔らかな感触が伝わる。これは何？

「ええい、やめんか！寝ぼけるな。離せ、シャルロット」

僕はその怒鳴り声でようやく目が覚めた。

「あっ…おはよう。箒」

「お前はどこを見ながら挨拶をしている？それと早くその手を離せ！」

横たわる僕の目線には鷲掴みにした大きなスイカが２つ。

その上をさらに見上げると少し不機嫌な顔をしている幼なじみがこちらを見下ろしている。

どうやら僕は起こしに来てくれた箒の胸を寝ぼけて鷲掴みにしてしまっていたようだ。

箒の大きな胸は触っていてとても気持ちがよかった。それにあの大きさは女性として羨ましくもある。

「いいから早く支度をしろ！」

「ごめんね。すぐ着替えるよ。」

急かす箒にそう告げて僕はすぐ着替えに取り掛かる。

こうして今日という1日が始まった。

――教室。

今日も基礎的な優しい内容の授業。正直簡単過ぎる。

そのせいか、つい僕は眠気に襲われウトウトしてしまう。

スパァン

そこへ織斑先生の出席簿が僕の頭に炸裂した。僕は痛みで頭を抱える。

「ほう、私の授業で居眠りか？余裕だな。デュノア」

鬼のような顔をした織斑先生。

「す、すいません」

「次このようなことがあれば次からはもっと重い罰を与えるから覚悟しろ」

う〜

織斑先生は少し苦手かもしれない。

でも、どことなく箒に似ているような気がする。

そう思い窓際に座る箒に視線を向けるが箒は外をボーっと眺めている。

「デュノアくん。大丈夫？」

隣の席の子が先ほどのことを心配してくれているようだ。

「うん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「きゃ。デュノアくんとお話ししちゃった」

このように僕への女の子の反応は相変わらず。

今朝も教室に入るや異な箒との関係について質問攻めされた。それもクラスの子だけではなく、その他クラスから大勢に訊かれた。

今は3時間目終了後の休み時間。

そこへ女の子が声をかけてきた。

「ちょっと、よろしくて？」

話しかけてきた相手は鮮やかでわずかにロールがかった金髪と白人特有の透き通ったブルーの瞳が特徴的な女の子だった。

たしかこの人はイギリス代表候補生の……

「えっと、たしかセシリア・オルコットさんだったよね？」

「まあ、わたくしのことをご存知なんですの？まあ、当然と言えば当然。わたくしはイギリス代表候補生にして、入試主席ですから…」

よく喋る人だな。

でもお人形さんみたいな綺麗な顔立ちをしてる。

「訊いていますの？」

「うん。ところで僕に何か用かな？」

「貴方も男にしてフランスの代表候補生と訊いていますわ。どうかしら？わたくしが放課後にＩＳの手解きをして差し上げてもよろしくてよ」

うーん。

困ったな。

放課後は箒と映画（ＤＶＤ）見ようと思ってたのに……

よし、断ろう。

「ごめんなさい。僕、放課後は用事があるんだ。」

「何ですの！男の分際でその態度。わたくしがわざわざ誘って差し上げましたのに…だいたい貴方……」

キーンコーンカーンコーン。

そこへ話に割って入ったのは４時間目開始を告げるチャイム。

「っ！……またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって？」
そう言うと急ぎ足で席に戻っていった。
チャイムが鳴り教壇に立っているのは織斑先生。
「それでは授業を始める前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めたいと思う。ちなみにクラス代表とは対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まぁ、クラス委員のことだな。自薦他薦は問わないぞ。だが、一年間は変更出来ないからそのつもりでな」
「はい。デュノアくんを推薦します」
「はい。私も」
「あちしも」
僕は何故かクラスの全員に推薦された。ただ1人を除いて…
「待ってください。納得がいきませんわ」
バンッと机を叩き立ち上がったのは先ほど話したオルコットさん。
「そのような選出は認められません！大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか？」
沈黙する場の空気。さらにセシリアは話を続ける。

「それに貴方、名前からして第二世代型ＩＳを製造してるデュノア社の息子なのでしょう？それなら貴方の専用機も底が知れますわね。時代遅れの第二世代型を製造するデュノア社の貴方ごときではクラス対抗戦を勝ち抜くなど到底不可能ですわ」

そのセシリアの言葉に沸々と怒りが込み上げてきた。

許さない。絶対に許さない。
お父さんの創ったものを悪くいった。
お父さんがどんな想いで創ったか知らないクセに……

ダンッ
（机を叩く音）

「決闘だ！僕が勝ったらその言葉訂正してもらう」

「いいですわよ。遊んで差し上げますわ」

「さて、話はまとまったようだな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。勝った方がクラス代表。２人は準備を行うように」

こうして僕らの対戦が決まった。

絶対に僕が勝ってお父さんの創ったＩＳの凄さを証明してみせる。

第４話　撃ち合い♪（前書き）

ども

感想覧から『この作品は少女漫画チックで珍しいですね』と言われてしまいました。

『珍しい』って言われるとすごく嬉しいですが、『少女漫画チック』って言われると正直複雑です。

果たして作風としてアリなのでしょうか？

第４話　撃ち合い♪

◇そして翌週、月曜。　セシリアとの対決の日。

「おい、いけそうか？シャルロット」

「大丈夫だよ。箒」

僕は専用機、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？を展開した。

山田先生のアナウンスがはいる。

「準備はいいですね？ではアリーナのゲートを開放します」

「じゃあ、いってくるね。箒」

「ああ」と箒が頷く。

僕は開放されたゲートからアリーナ・ステージ中央へと飛び出した。

待ち受けるはセシリア・オルコット。

僕のお父さんを悪く言ったいわば敵。

「よく逃げずにきましたわね。褒めて差し上げますわ。でも、そんな時代遅れなＩＳでわたくしに勝てるのかしら？」

「勝てるよ。僕がそれを証明してみせる」

ＩＳバトルの勝敗とはシールドエネルギーを０にすることで勝ちが

決まる。
このシールドエネルギーとは簡単に説明すると操縦者を保護するためのエネルギーのようなもの。
ちなみに操縦者が死なないようにＩＳには『絶対防御』という能力が必ず備わっている。あらゆる攻撃を防ぐ変わりにこれはシールドエネルギーを激しく消耗してしまう。

試合開始のブザーが鳴り響いた。
ブ――――――
―警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね」
キュインッ！

試合開始直後にセシリアの持つレーザーライフルによる射撃が始まる。

それをすかさず回避。
ここで一呼吸。
そして僕なりに自己分析してみた。
セシリアのＩＳは第三世代型ＩＳその名も『ブルー・ティアーズ』
手には先ほどのレーザーライフル〈スターライトｍｋ？〉を所持している。
ブルー・ティアーズを戦闘タイプに分けると遠距離射撃型。
対する僕のＩＳは第二世代型『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』

このＩＳの長所は後付武装とパッケージが豊富で、装備に応じて全距離タイプに切り替えることができる。
つまり大量の武器を出し入れ出来る万能タイプで使い勝手がいい。

さらに僕には特殊能力がある。
その名も高速切替（ラピッド・スイッチ）
普通武器を展開し量子構成（実体化）させるには通常1～2秒かかる。それを一瞬で照準を合わせるのと同時に行うことができる。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で」

射撃射撃射撃射撃射撃射撃の嵐。

だが、シャルロットには全てが見えていた。
全ての弾丸を避けて高速切替（ラピッド・スイッチ）により武器を呼ぶ出す。

その両手に握られているのは６２口径連装ショットガン（レイン・オブ・サタディ）を2丁。
それを至近距離でセシリアに向けて放った。

「きゃあああ」

見事被弾。
距離を空け体勢を立て直そうと必死なセシリア。
そこへさらに追い討ちをかける。
シャルロットは瞬時に右手のショットガンをしまい近接ブレード（ブレッド・スライサー）を呼び出し切りきざむ。

そして左手のショットガンが火を噴いた。

「クッ」

みるみるうちにセシリアのシールドエネルギーが無くなった。

やはり接近戦に持ち込んだら怖くない。

ブルー・ティアーズは遠距離射撃型。

間合いに入れば使える武器がないのだから。

（そろそろトドメを）

シャルロットがそう思った瞬間セシリアは上空へ急上昇。

またもセシリアは距離を空けようとする。

「させない」

近距離でトドメをさしにシャルロットが追いかける。

しかしそれは罠だった。

「かかりましたわね」

セシリアは上空へと誘っていた。

セシリアはまんまと掛かったシャルロットに無反動旋回（ゼロリアクトターン）で急転回し

ビットと呼ばれる遠隔操作できる銃器を放った。

ビットの攻撃がシャルロットに被弾。

「きゃああ」

つい女の悲鳴をあげてしまうシャルロット。
「あら。男のくせに可愛らしい声出しますのね。もっときかせてくださいな。その苦痛の叫びを」

ビットが四方八方からシャルロットを襲う。
シャルロットは避けるがビットの射撃スピードの方が勝り的にされる。
リヴァイヴのシールドエネルギーがみるみるうちに減っていく。

（ごめんね、お父さん。僕にはお父さんの誇りやプライドは守れないや）

もうここまでかと、シャルロットは諦めかけた。
そんな時、箒が叫ぶ。
「諦めるな！最後まで諦めるな！私はそんな幼なじみを持った覚えはない！」

その言葉にシャルロットは我にかえる。
そして最後の力を振り絞り高速切替（ラピッド・スイッチ）で両手にマシンガンを展開。
ズドドドドドドドドドドドドドドドドド

そのままマシンガンを乱射し1機また1機とビットを撃ち落としていく。

「…！！！……」

セシリアの顔には焦りが出始める。

シャルロットは気付いた。

ビットを使用してる時は手に持っているレーザーライフルを使用しない。

いや、出来ない。

つまり意識を集中しないとビットは使用できないみたいだ。

ならば、ビットを使用している時は無防備。

シャルロットは空中を駆け回りながらマシンガンで射撃。

「チョロチョロと鬱陶しいですわ」

セシリアが再びビットを放った。

シャルロットは最後の切り札……瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用。

それによる超スピードでシャルロットはセシリアの背後に回り込み頭に銃口を突きつける。

「チェック・メイト」

「ま、参りました」

動けない。空を舞うビットの射撃よりシャルロットが引き金を引く方が速いのだから。

シールドエネルギーがわずかしかないセシリアは銃口を頭に突きつけられ降参した。

ブザーと共に試合は終わった。

勝者—シャルロット・デュノア

第5話　三つ巴♪（前書き）

昨日はプライベートが忙しくあまり書けなかった。

今日からまた1人でも多く読んで頂けるよう頑張ります。

第5話　三つ巴♪

◇試合が終わって今の時刻はおよそ１８：００

僕と箒は試合会場の第三アリーナから学生寮へと向かって歩いていた。

赤い夕暮れの中シャルロットが口を開く。

「あ、あのね。さっきはありがとう。あのとき箒が叫んでくれなかったらきっと僕は負けてたよ」

「別に私は何もしていない。それに幼なじみを応援するのは突然だ！」

「そんなこと言って、いつも箒は僕に優しいよね」

チュッ♪

シャルロットは箒の左頬にキスをした。

「な…何をする！」

……ドキドキ

「えへへ……さっきのお礼だよ」

そう言うと照れくささから顔を少し赤らめたシャルロットは先に寮

へと帰ってしまう。

「ふ、不覚だ！幼なじみの……それも女にドキドキしてしまうなんて……そうだ！きっと私は疲れているんだ。そうに違いない！」

キスをされた左頬をおさえながら、箒はずっとそんなことを1人呟きながら寮へと戻っていった。

サァァァァァ

セシリアはアリーナの更衣室で1人シャワーを浴びながら考えていた。

何故あの方のことを思い出してしまうのだろう？

あの何かを決意した強い眼差し。

「シャルル・デュノア」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。

どうしようもなくドキドキとして、セシリアはそっと自分の唇を撫でてみる。水滴に濡れた形のいい唇は、触れることを望んでいたかのように不思議な興奮を生み出した。

「……」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。
なんだろう？この気持ちは。
意識すると途端に胸をいっぱいにする、この感情の弄流は。
知りたい。
その正体を。その向こう側にあるものを。
知りたい。シャルルの、ことを

浴室にはただただ水の流れる音だけが響いていた。

―翌日の教室。

「おはようございます。シャルルさん」

今までの態度とは１８０度違い礼儀正しくセシリアがシャルロットに話しかける。
そのせいか、シャルロットは少し歯切れの悪い返事をしてしまう。

「お、おはよう。…オルコットさん」

「あら、オルコットさんなんて他人行儀な呼び方じゃなく、わたくしのことはセシリアとお呼びくださいな」

すると、セシリアはその後少し悪びれて話を続ける。

「シャルルさん、こないだのことを深く謝罪いたします。シャルルさんのお父様を悪く言うなんて、わたくしどうかしておりましたわ」

こ、この子、本当は素直でいい子なんだ！

よし、仲直りしよう。

「もう怒ってないよ。それに僕も『決闘だ！』って怒鳴っちゃったし…」

「そうですか。それは良かったですわ。では、今日の昼食ご一緒しても？」

「別に構わないけど……箒もいるよ」

「箒って、たしか篠ノ之さんのことですわよね？ま、まさか…お2人はお付き合いしてるワケじゃありませんよね？」

「あははは、違うよ。僕と箒は幼なじみなんだ」

セシリアは可笑しなこというなぁ。

それにセシリアには言えないけど、そもそも僕は女の子だし女の子同士で付き合うわけがない。

「そうですか。それは、ひと安心ですわ」

「ひと安心？それはどういう意味かな？」

セシリアは少し焦って話を反らすことにした。

「こ、こちらのお話ですわ。それより、今日2組にですが転校生が来るのはご存知ですの？」

「えっ！転校生！！？」

「別に驚くことも無い。このクラスに転入するワケでもないのだろう？」

あれ？いつの間にか箒がいる。やっぱり箒も女の子だし噂に敏感なのかな？

普段は男装してる僕より男らしいのに…

「って痛い痛い痛い痛い～。何でつねるの？箒」

箒がシャルロットの右頬をつねっている。

「お前が失礼なことを考えるからだ！」

何で僕の考えがわかったんだろう？そういえば、こういうのを以心伝心っていったっけ。

「篠ノ之さん！やめてください。シャルルさんが可哀想ですわ」

「ふんっ……お前には関係ない」

それから何故か言い争いになる2人。そんな中、僕にはある疑問が湧く。

あれ？でも、おかしい！

なんで入学から日が経ってない、こんな時期に転校生？やはり僕やセシリアと同じくデータ収集が目的なのだろうか…

そもそも第三世代型を開発できず経営危機に陥っているのは別にデュノア社だけではない。

どこの国も第三世代型開発は未だに初期段階で完璧なものとはいえ

ない。
今、第三世代型完成の最有力候補の国の名として上げられるのは、ドイツ、イタリア、イギリス。
イギリスから日本にセシリアが来たのも実稼働データを取る目的が大きいだろう。
つまり、どこの国も完璧な第三世代型を開発するのに必死なのである。

そんな朝のＨＲ前の空き時間を使った僕らの会話中に噂の転校生がやってきた。ガラッと勢いよく扉が開く。

「このクラスのクラス代表は誰？」

１組の教室に入って来たのはツインテールの少し小柄な女の子。

「誰だ！お前は？」

箒がギロリと睨む。
だが、その子は決してひるまない。

「中国代表候補生、凰　鈴音　（ファン　リンイン）よ！今日は宣戦布告に来たってわけ！このクラスのクラス代表は誰？」

なるほどこの子が噂の転校生。
みんなは理解する。
そしてセシリアがその問に答える。

「シャルルさんですわ」

「シャルル？もしかしてテレビに出てた……？」

すると、鈴が周りを見渡し僕と目が合う。
「……ほ……ほ、本物！やっぱりＩＳ学園に入学してたんだ！しかも、このクラスだったの…？」

一目惚れだった。
シャルル（シャルロット）のことは『世界初ＩＳを動かした男』として世界的ニュースや新聞などで有名人。
なんと、そんなシャルロットに鈴は恋心を抱いていたのだ。
だが、そんなシャルロットがシャルルという偽名で女の子だとは鈴が知るはずがない。
「はじめまして。凰さん」
恥ずかしさからか、さっきまでの威勢を無くしてしまった鈴。
「は、は、はじめまして！」
「僕はシャルル・デュノア。シャルルって呼んでね」
にっこりと鈴に微笑むシャルロット。
だが、シャルロットは鈴の気持ちなど知る由もない。
（テ、テレビで見るより生の方が断然カッコイいし可愛い。てか、何でこのクラスにいるのよ！どうしよう。さっきので変な子って思

われたら……宣戦布告とかやるんじゃなかった。もう、第一印象最悪)

気持ちをなんとか持ち直し鈴は話しかける。

「あ、あんたのことは知ってる。それよりあとで昼食でも一緒にどうかな？2人で話があるんだけど、いいわよね？」

鈴は早速アプローチをかける。

そこへセシリアが話に割って入る。

「そんな抜け駆け断じて許しませんわ。だいたい、あなたは2組。2組の人と食事を済ませればいいんじゃなくて？」

鈴はムッとした。

そしてこいつは恋の敵だとすぐに認識する。

「あんたに関係ないでしょ！わたしはシャルルに言ってんのよ！このグルグルロール頭」

「なっ…何ですって！」

「待て！そもそも先にシャルロッ…じゃなくてシャルルを誘ったのは私だ！」

箒も加わりその後は3人でしっちゃかめっちゃかな言い争いに…。

僕はこの状況について行けない。みんなで食べればいいのに…。もう勝手にやってよ。

結局、朝のＨ．Ｒが始まり教室にやってきた織斑先生に怒鳴られ僕らは４人で昼食を取ることとなった。

第6話　昼食は屋上で♪（前書き）

今回は俺にしては文章が少し長め。
基本は短文連続モノなのですが今回は少し頑張ったのではないでしょうか？

頑張ったな俺。えらい。エロい。

誰も褒めてくれないから自分で褒めてみた。

第6話　昼食は屋上で♪

◇今はお昼休み。
僕達はお弁当を持参して屋上で昼食を食べることとなった。

メンバーは僕と箒とセシリアと凰さんの4人。
でも、みんなはあまり仲が良くない。
いったい何故？

とりあえず、僕は場を和ませるため新しく友達になった凰さんに話をふってみる。

「ねえ、凰さん。その酢豚ひと口欲しいな」

「い、いいわよ！そのかわり、わたしのことはこれから鈴って呼びなさい！いいわね？」

「うん。わかった。鈴」

「バ、バカ…いきなり呼ばないでよ！心の準備ってもんがあるでしょうが！」

顔を赤くする鈴。

バカって言われた。呼べって言ったから呼んだのに……それは、さすがに理不尽だよ。鈴。

そう言えば鈴は2組のクラス代表らしい。
いずれ鈴とも闘うのかな？

僕は正直嫌だな。
あまり友達と争うなんてことはしたくない。
例えそれが試合であってもね。
そんな僕の思いも知らず食事と会話は続く。
「おい、シャルル。私のもどうだ？」
「ありがとう。箒」
そう言って箒のお弁当からも唐揚げを１つ貰う。僕は先ほどの酢豚、唐揚げと続けて食べる。
「うん。すごく美味しいよ。２人とも料理の才能あるね」
「うむ。まあ、当然だ」
偉そうに腕を組む箒。
「べっ、別にあんたのために作ったんじゃないんだからね」
そう言いつつも再度鈴の顔は赤い。
そんな会話が続く中彼女の存在を忘れていた。
そう。セシリアだ。
「シャルルさん。わたくしをお忘れではなくて？では、わたくしが丹精込めたサンドイッチをおひとつどうぞ」
「うん。じゃあ、遠慮なくいただくよ」

僕はセシリアのぎっしり詰まったお弁当箱からサンドイッチを1つ貰ってパクリと勢いよく食べた。

だが、そのサンドイッチの味は異常だった。味付けを間違えたとか、僕の口には合わないとか、そんなレベルではなく……『絶望的』な味だった。

そう。一言でいうならば……『不味い』のだ。

しかし、お人好し属性のシャルロットには本音が言えなかった。

（不味いなんてヒドいこと言えないし、ここはあたりざわりがないコメントを…）

「こ……こ、個性的な味だね。い、いんじゃないかな」

すでにシャルロットの目には涙が溜まっている。

だが、セシリアはそれを勘違いする。

「まあ、感動するほどお口に合いましたの？シャルルさんの為に作ったかいがありましたわ。では、残りも全部召し上がってください」

セシリアがシャルロットにサンドイッチを差し出す。

それを断れないシャルロットは泣きながらサンドイッチを完食し苦しい昼食を終えた。

今の時刻は１９：１０

午後の授業を終えた僕と箒は自室でお茶を飲みながらまったりとした時間を過ごしていた。

「やっぱり日本のお茶は美味しいね。ところで前々から思ってたんだけど箒は剣道部には行かなくていいの？」

「行かない！お前のことが心配だからな。」

「大丈夫だよ。別に小学生の時みたいにもうイジメられたりしないし新しい友達もたくさん出来たからね」

箒はハア～と大きな溜め息をつく。

「その友達が心配なんだ。お前なら襲われかねないからな」

僕の脳裏には『？』が浮かぶ。

襲う？何のことを言っているんだろう。

「わからないなら別にいい。ただ少し気をつけろ！お前は少しヌケているところがあるからな」

僕にはたまに箒の言ってることがわからない。

それになんだか箒は昔より心配性になったなぁ。僕の『代表候補生』という名は肩書きではない。それなりに武術も心得ている。誰に襲われても負けないよ。

「そう言えば少し喉が渇いたな。ジュースを買ってくるがシャルロットもいるか？」

「えっ？じゃあアップルジュース」

「ああ、わかった」と言い終えると箒は自室を出て行った。
僕はその間に自室に備わる浴室でシャワーを浴びることにした。

サァァァァァァ

「ＬａＬａ～……Ｌａ…♪」

僕は鼻歌混じりにシャワーを浴びる。

（あれ？シャンプーがないな）

そこへガチャリとドアの開く音がする。

（あっ…箒が帰ってきたみたいだ。ついでにシャンプーを取ってもらおう）

ガチャ（ドアの音）

「箒。悪いんだけど棚から替えのシャンプー取ってくれないかな？」

「あっ！シャルルさんそんなところに……」

「「……」」

2人は無言で固まった。
シャルロットが浴室の扉を開けるとなんと、そこには箒ではなくセシリアが立っていたのだ。
シャルロットの身体にはバスタオルが一枚のみ。
普段は特殊なコルセットでおさえつけているシャルロットの胸。
しかし今そんなものは身に着けていない。
セシリアの視界にはシャルロットのたわわに膨らんだ胸が目に入っていた。
（お……女！シャルルさんが女の子！そんな！信じられない……）
セシリアは驚きショックを受けた。少し遊びに来たつもりがとんでもないものを見てしまったのだから。
セシリアはそのまま部屋から出て行きフラフラになりながら自分の部屋へ戻っていった。
（バレた！どうしよう！どうしよう！セシリアに間違いなく見られた。僕はいったいどうすれば……）
そこへ呑気に箒が帰ってきた。
「すまない。アップルジュースは売り切れだったからオレンジジュースを買ったきたが良かったか？」
僕は泣きながらガバッと箒に抱きつく。
「な…なんだ突然！？」

箒は突然のことに理解が出来ない。
「ど、どうしよう。どうしよう。セシリアに僕が女の子ってバレちゃったよ」
困惑する僕。
そんな僕に箒は冷静に言葉を返す。
「少し落ち着いて話をしろ！訳が分からん」
僕はさっきの出来事を箒に洗いざらい説明した。
箒は黙って最後まで訊いてくれた。
「なるほどな！だが、私はいつかこうなることがわかっていた。だいたいお前はどこかヌケているんだ！もっと注意力を身につけろ！そもそもお前は……」
僕は正座をさせられ箒の話（説教）を訊かされた。
「で？結局、僕はどうすればいいかな？」
そもそもＩＳ学園はＩＳを扱う育成機関。
元々ＩＳは女の子にしか扱えず学園にも女の子しかいない。だから女の子だったとしても普通ならなんら問題ない。
しかし今やシャルル（シャルロット）のことは『世界初ＩＳを使える男』として世界的ニュースになっているほど有名。
それ以来、フランスは他国から多額の支援金などを受けている。
だから、もし女の子だということが世間に知れたら大変なことにな

る。

実は性別を偽ってました「テヘッ」じゃすまないだろう。

『金返せ詐欺師』だとか『フランス人は嘘つき』だとか『信頼出来ない』など、そんな悪いイメージばかりがつく。

下手をすればこんな些細な理由が戦争へも発展する。これは言わば国の信頼と命に関わる『国際問題』。

つまり企業…否……国に関わる存亡の危機。

そんな大問題に箒は真面目に答える。

「これでセシリアを始末してこい！」

そう言って箒が僕に手渡したのはなんと……『日本刀』

ダメだよ。色々ダメだよ。モラルとかセンスとか以前の問題だ。それは犯罪だよ。

そもそもなんで『日本刀』所持してるの？違法だよ！！

こうして問題が解決することはなく結局、僕はセシリアと明日じっくり話し合うことにした。

今日僕に出来ることは、それまでセシリアが誰にも言いふらさないことを祈ることのみだった。

第7話　バッ♪（前書き）

先にお詫びいたします。
キャラ崩壊しないみたいなことを書きつつ今回させてしまいました。
気がついたらセシリアがえらいことになった。
ご意見、感想、ダメ出しお待ちしております。

第7話　バッ♪

◇セシリアは1人自室で悩んでいた。

まだ信じられない。

まさかシャルルさんが女の子だったなんて……

わたくしは一体どうすればいいの……？

―セシリアには両親がいた。

母は強く厳しい人だった。女でありながらいくつもの会社を経営し成功を収めた人だった。セシリアにとっては母でありながらも憧れの存在。

それに相反して父は母の顔色ばかりうかがう情けない人だった。元々父は名家に婿入りした人。母には多くの引け目を感じていたのだろう。

さらにそこへ追い討ちをかけるようにＩＳが発表された。

その圧倒的なスペックと女性しか扱えないという理由からＩＳは世間に『女尊男卑社会』を生み出した。それにより父の態度は益々弱いものになっていった。母はどこかそれが鬱陶しそうで、父との会話自体を拒んでいるきらいがあった。

セシリアはそんな両親を幼い頃から見て育った。

だから将来は情けない男とは結婚しないと心に決めていた。

そんなある日、事故が起き両親は他界した。越境鉄道の横転事故。

死傷者は百万を超える大規模な事故だった。とてもあっさりと両親は帰らぬ人となった。

いつも別々に過ごしていた両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのか、それは未だにわからない。

（けど、いつかわたくしにも好きな人が出来れば本当の理由がわかる）

セシリアにはそんな気がした。そんな過去を持つ彼女はこの学園に来てついに出会ってしまった。

父には決してないあの強い瞳と心を持つ理想の男性……

……『シャルル・デュノア』に…

そう。わたくしは彼のことがたまらなく好き。

例え女性であっても……

きっと、どうすべきかはわたくしの心の中で、すでに決まっていたのかもしれない。

その答えは……

―翌朝。

僕は教室に入るが以前と変わらずみんなは接してくれた。

どうやら僕が女の子だという噂は一切流れていないようだ。

僕より少し遅れてセシリアが登校してくる。そして僕に近づいてき

た。

「ちょっと、いいかしら？」

僕はセシリアに連れられ人気がない屋上で話をすることとなった。
話題は間違いなく昨日のことだろう。

僕が先に話題を切り出すことにした。

「ごめんなさい。僕はずっと騙してた。僕の本当の名前はシャルロット・デュノア。わかってるだろうけど、性別は女。ここへ男としてきた理由は経営危機に陥った父の会社の宣伝とＩＳのデータを収集するためなんだ。
お願い！都合のいい話だと思われるだろうけど、このことはこのまま誰にも話さないで欲しい…」

僕はありのままの全てを話した。
話を聞き終えたセシリアが口を開く。

「正直わたくしは怒っています。何故わたくしにも話してくださらなかったのですか？」

「ごめんなさい。それは…その…」
僕には上手く答えられない。
はぁ～とセシリアが溜め息を一つ。

「たしかに都合がいい話ですわね。だから貴方には相応のバツを与えます。そのかわりこの話は秘密にしてさしあげますわ。さあ、目をつぶり歯を食いしばりなさい」

するとセシリアは右手を高く構える。

これは間違いなくビンタだ。

でも、そんなもので許されるならと僕は目をつぶった。

だが、目をつぶると僕にはビンタによる頬の痛みではなく、口に柔らかな気持ちいい感触が伝わった。

目を開けると僕とセシリアの唇が重なっていた。

そう。僕はセシリアとキスをしていた。

「ン～……んんっ……はぁはぁ……いったい！何を？」

「だから言ったでしょう。これはバツですわ」

顔を赤くしたセシリアがまるで悪戯を成功させた子供のように笑い屋上をあとにした。

僕は脱力して地面にへたり込んでしまう。

まだ身体がアツい。柔らかかったな。

セシリアの唇……

僕は思い出し赤くなる。

僕はしばらく放心状態。

今日の授業は４時間目から受けることとなった。

―あれから数日、今僕はクラス対抗戦に向けて第三アリーナで箒と訓練中。

ちなみに鈴とセシリアは誘っていない。

鈴はクラス対抗戦で戦う相手だから手の内を見せたくないから誘わない。セシリアはと言うとあの一件から妙に恥ずかしいから誘えない。

だけど、セシリアは以前と変わらず僕に接してくる。

僕は未だにセシリアが何故あんなことをしたかわからない。

僕のことを女の子と知っているはずなのに……もしかして僕のことを『好き』とか？

そんなワケないよね。バツって言ってたし大体女の子同士なんて変だもん。

あんな気持ちになったのも突然あんなことされたからってだけ…。

ホントだよ。

僕にはそういう趣味とか無いから……

「おい。シャルロット！ここまでにするぞ！もう景色も暗くなってきた」

「そうだね。箒」

僕らは訓練を切り上げて自室に向った。

すると、廊下でセシリアとすれ違う。

「あら、シャルルさん。どこにいらしたの？探しましたのよ」

「い、いや、ちょっと箒と訓練を…」

僕はたじろぐ。

「また箒さんと…」

セシリアはジロっと箒を睨む。
すると箒も負けじと睨み返す。

いつの間にか名前で呼び合う仲になったのになんで仲が悪そうなんだろう？僕には疑問だらけです。
「シャルロットさん。そんなことより汗をかきましたでしょう？一緒にシャワーを浴びましょう」

「な、な、な、何いってんの？」
僕は顔を真っ赤にする。
だって可愛い子にこんなこと言われたらなるでしょ？例えそれが同性であっても…

そこへ箒が割ってはいる。
「お前のことはシャルロットから訊いている！だが、あまりシャルロットをからかうな！」
「別にからかってなんていませんわ。わたくしはただシャルロットさんの身体を洗って差し上げようと思っただけですわ」

「あ、あ…あら…洗って！……」

僕はさらに顔を赤らめ爆発寸前。

「そんなことはさせない。いくぞ！シャルロット」

僕は服の首裾を掴まれ箒に連れて行かれる。

「あら、残念。でも次は負けませんでしてよ」

こうして僕は新たな理解者（？）を手に入れた。

でも、これからも僕の苦悩の学園生活は続く。

第8話　クラス対抗戦♪（前書き）

今更ですがグダグダ感でてきましたね。
誰か上手いことまとめて（笑）

第8話　クラス対抗戦♪

◇5月。ついに始まったクラス対抗戦。場所は第二アリーナ。
クラス代表に選ばれた僕は試合に備え男子更衣室で急ぎＩＳスーツに着替えていた。

「それにしても、すごいなぁ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見る。
アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。
会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

そしてついに第一試合の組み合わせがモニターで発表された。

１組　シャルル・デュノアＶＳ　３組　鏡　鏡華

鏡（かがみ）　鏡華（きょうか）さん。

この人は学内でも違う意味でかなりの有名人。
入学からまだ日が浅い頃。学内のＩＳを許可なく借りそれを勝手にペンキで豹柄（ヒョウ）に塗装したそうだ。
その後、織斑先生に見つかりこっぴどく怒られたらしい。
そのときの言い訳の仕方もすごかったらしく『ウチは虎になるんや～』だそうです。

僕とはちょっと性格が合わなそうだなぁ…。
僕は着替え終え更衣室から出た。
すると、後ろから肩をポンポンと叩かれた。だが、後ろを振り返るが誰もいない。
「あれ？誰もいない」
「下や！どアホ！」
僕が下を見下ろすとショートヘアで綺麗な黒髪の小さな女の子が立っていた。
「迷子かな？お名前は？」
僕はその小さな女の子に話しかける。
「誰が迷子やっ！」
スパァン
ツッコミと共に勢いよくハリセンで頭を叩かれた。
「痛いよ。迷子の小学生じゃないの？」
「誰が小学生や！ウチの名前は鏡　鏡華。あんたの対戦相手や！顔ぐらい覚えとけ」
ああ、この人が噂の鏡さんか。顔を見るのは初めてだ。すごく小さくてまるで妖精みたい。

スパァン

またも僕の頭にハリセンが炸裂。

「誰が妖精や！そんなこっぱずかしいことよう言えんなぁ」

あれ？僕声に出したかな？なんでわかったの？

「まあ、ええわ。挨拶もすんだし次は試合で会おうや。ナイスボケやったでぇ」

そう言い終えると彼女は走り去っていった。

場所：アリーナ中央。

対するは先ほどの鏡　鏡華さん。

試合開始のブザーが鳴る。

彼女は専用機持ちではない。

搭乗機は学校仕様のリヴァイヴ。

僕のお父さんの会社が開発した量産機だ。

ならば僕の改良型ラファール・リヴァイヴ・カスタム２の方が基本性能、機動性、武装装備など全てが勝っている。

（僕が負けるわけがないんだ！！）

僕は試合開始直後、右手にショットガン（レイン・オブ・サタディ）

を一瞬で展開し相手に照準をあわせ攻撃。
しかし彼女は空中に舞いヒラリとその攻撃をかわす。
まるで、読まれていたかのように……
さらに僕はお構いなしに攻撃を続ける。左手にアサルトマシンガンを展開。
鏡さんにぶっ放す。

ズダダダダダダ

銃声だけが響く。
そう。当たらないのだ。全ての弾が空をきる。
鏡さんの回避力は以上だ。あれだけの弾数を全てさばくなんて。
僕は回避しながら距離をおこうとする彼女を追撃する。
しかし遅かった。すでに彼女の攻撃は始まっていたのだ。
充分に距離を保ったところで彼女は右手にアサルトライフルを展開。

「よっしゃ！そろそろいくでぇ」

それを両手で構え発砲。

ドォンドォン

僕の肩部に2発命中。
シールドエネルギーが削られた。その後も徐々にエネルギーが削られていく。
このままでは負ける。両手にマシンガンを展開。
（このマシンガンの弾数なら外さないはず…）
だが、それすらも読まれていた。
ドォンドォン
マシンガンを展開し構えた瞬間。手から銃を撃ち落とされた。
（し……しまった）
アサルトライフルによる銃撃のあと追加でミサイルが4発飛んでくる。
ズドオオオズズオオオオオオオオオオオオオオ――ン
ミサイルが2発命中。今ので大幅にシールドエネルギーが削られた。
（一体どうなってるの？僕のリヴァイヴの方が優れているはず。

お父さんが丹精込めて作ってくれたんだ。あんな量産機なんかに負けるワケが……）

すると、すでに勝ち誇った雰囲気で鏡さんがプライベートチャンネル（テレビ電話みたいなもの）で話しかけてくる。

「今『量産機なんかに負けるワケがない』って考えたやろ？」

「えっ？」

（なんで？心が読まれた？そんなワケないよね）

「ところがドッコイ。それがあるねん。ウチにはそういう『力』あるから」

（また読まれた）

「な、…何をいってるの？そんなの誰も信じるわけがないよ。嘘だ！」

僕には動揺が隠せない。

「そうなん。じゃあ、信じなくてもええよ。『シャルロット』ちゃん」

なぜそれを？

信じられない。

そのことを知ってるのは箒とセシリアだけのはず……

僕は超能力やオカルトなんかは信じない方だし…ましてや人の心を読むなんて……でも今ので信じざるを得ない。

彼女には何か特別な力がある。

鏡（かがみ）　鏡華（きょうか）

……彼女は幼い頃に両親を交通事故で亡くした。
それを境に彼女は親戚などにたらい回しにされた。
元々、彼女の両親には大量の借金があり親戚などにお金を借りていた。
そのお金を返せずに亡くなった両親。
随分妬まれ嫌われていたのだろう。
そんな嫌われものの鏡家の娘など誰が快く引き取るだろうか？
彼女はたらい回しにされるうちに思った。

『ウチは誰からも好かれる人間になろう』

その時から彼女は人の顔色ばかりを伺うようになり始めた。
気に入られたい。もう捨てられたくない。
その一心で手にいれたのが『読心術』

だが、それはもうただの『読心術』ではない。

元々、読心術とは相手のわずかな顔の『表情』や『しぐさ』や『筋肉の動き』を読み取り考えや思いを探るもの。
しかしそれは正確にわかるものではない。

だが、鏡華にはわかる。全てではないが他人の考えていることまで正確にわかるのだ。

「あんたはウチに勝てへん。あんたの敗因は自分を特別な存在やと過大評価しすぎた。専用機持ちに高速切替(ラピッド・スイッチ)やっけ？ウチにはもっと特別な力があるからな」

たしかに僕は自分を過大評価しすぎているところがあったのかもしれない。
専用機持ちで普通の人にはマネできない特殊能力、高速切替(ラピッド・スイッチ)。
それだけの力を持っていて何も感じないワケない。
けど、それ以上に僕が自分を特別だと思っていたことは、この機体がお父さんの作ってくれたものだということ。
だから、そのお父さんのプライドに賭けて……

「負けられないんだあああああ」

僕は鏡さんに向かって突っ込む。

「なんや！アホみたいに突っ込むだけか？」

鏡さんのアサルトライフルによる狙撃。

ドォン…ドォン

僕は瞬時に左手の物理シールドを呼び出し弾を防ぐ。

ガキン　キン

弾をハジく。

「やるやん。それは読めんかったわ。けど次のは読める」

（読める。次は真上から主力武器で攻撃やろ。主力武器？えっ？まさか……）

「知ってる？この世には、わかってても避けれない攻撃があるんだよ」

リヴァイヴには第二世代型最強と謳われた装備がある。
それはずっとシャルロットが装備していた盾の中にあった。

盾の装備がはじけ飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。６５口径パイルバンカー〈灰色の鱗殻（グレート・スケール）〉。
通称。
『盾殺し（シールド・ピアース）』

シャルロットはそれを真上から左手拳をきつく握りしめ、叩き込むように突き出す。

ズカンッ！！！

「ぐわあぁっ」

パイルバンカーの一撃が鏡華に叩き込まれる。
シールドエネルギーが集中して絶対防御を発動して防ぐものの、エネルギー残量がごっそり奪われる。

（クッ…なんやねん。こんな重い一撃初めてや。噂にはきいとったけど……早く離脱せんと）

だが、これで終わりではない。
これはリボルバー構造により高速で連射可能なのだ。
ズガンッ！ズカンッ！ズカンッ！

続けざまに三発撃ち込まれた。これにより鏡華のシールドエネルギーが０になり試合が終了した。

勝者―シャルル・デュノア

第9話　鈴の猛攻♪（前書き）

戦闘シーンを文章だけで伝えるのはちとキツい。
俺には文才はないですから……

ああ～次はほのぼのエロギャグ路線の話を書きたい。
てか、この作品のセシリアはお疲れですね。

第9話　鈴の猛攻♪

◇第二アリーナ。

ウチが負けた？嘘や！

そんなん信じられへん。　ウチは特別な人間。

選ばれた人間やのに…。

ウチの名前は『鏡華』。

人の心を写し出す鏡。

ゆえに無敵、最強。

なのにウチは負けた。

負けるのは嫌や。

自分の居場所が無くなる。

ウチは親戚にたらい回しにされた挙げ句、結局養護施設に入れられた。そのとき施設内で偶然ＩＳ適性検査がありウチはＡランクを出した。

そんなウチを色んな人が養子に欲しいと言った。

だってそうやろ？

ウチがＩＳ学園に通い、もし将来ＩＳ関係の仕事につけば多額の金が手に入るんやから……

今必要としてくれている里親のためにもトップで好成績じゃないとあかん。いい仕事につかれへん。必要とされなくなり、また居場所を無くしてしまう。だから負けるワケにはいかん。

けどウチは……負けてしまった。

ウチは負けたショックで地面に倒れるようにうずくまる。そこへシ

ャルロットが話しかける。

「大丈夫？」

なんやねん！こいつ！ムカつく。ムカつくわ。ウチのことなんも知らんクセに！

「そんな敗者を哀れむような同情ムカつくわ！偽善者！」

「違うよ。別に哀れんでなんかない」

そう言ったシャルロットの感情を鏡華が読むが、確かに彼女には哀れみなど微塵もなく純粋に彼女を心配しての言葉だった。

なんやねん！こいつ！なんで他人に優しくするねん……

そうか！やからウチはこいつに負けたんか？

ウチは自分の事ばかりで他人に気遣ったり優しくするなんてことを今までしなかった。

多分それが……こいつの『強さ』。

ずっとウチは大事なことを忘れていた。ウチには心が読めても肝心なものは何も見えてなかった。

【きっとウチの心の鏡はずっと曇ってたんや】

「……わ、悪かったわ。言い過ぎた。それとおおきにな！あんたのおかげで大事な事少しだけ思い出したわ。それと、あんたの秘密は誰にも話さんからウチの変わりに絶対優勝してな」

「うん。ありがとう。頑張るよ」

そう言った鏡華の言葉は負けたというのにとても清々しいものだった。まるでスポーツをやり終えたかのように。

シャルロットは思う。次、彼女と戦う時は彼女はさらに強くなっていることだろう…と。

僕は試合後、アリーナの自分の控え室に1度戻る。
すると控え室に箒とセシリアが待っていてくれた。僕は試合後、アリーナの自分の控え室に1度戻る。
すると控え室に箒とセシリアが待っていてくれた。

「よくあそこから勝ったものだな。だが、攻撃を食らいすぎだ！ハラハラしたぞ！」

「そうですわ。ものすごく心配でしたわ。お身体は大丈夫ですか？もしシャルロットさんの綺麗な肌に傷でもつけたら、あの対戦相手の方を八つ裂きにしなければいけませんわ」

なんかセシリア怖い。こんなキャラだったかな？

そして、ついに決勝戦の相手が決まり始まる。

1組　シャルル・デュノアＶＳ　2組　凰　鈴音

やっぱり鈴か！
鈴は中国代表候補生というだけあってかなりの実力。
先ほどの4組（名前忘れた）との試合の勝敗は一瞬だったらしいし…。

場所・アリーナステージ中央。
プライベートチャンネルで鈴が話しかけてきた。

「いくらシャルルでも手加減はしないから。いいわね？」

「うん。もちろん」

鈴の機体は
『甲龍（こうりゅう）』
正確にはシェンロン。
近・中接距離両用型ＩＳ。
僕の距離で戦えば勝てる。
試合のブザーが鳴る。

「いくわよ！」

鈴がそう言って展開したのは『双天牙月』と呼ばれる重量を感じさせる幅広の片手剣を２本。
それを両手に持ちこちらへ向かってくる。

対する僕もアサルトライフルを一瞬で展開し両手に構えた。
そして牽制で５発撃ち込む。
ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

鈴に被弾。

（よし、全弾命中）

続けざまに撃とうとする。しかし鈴が僕の視界から消えた。

「上だ！シャルロット」

アリーナの観客席内から箒が叫ぶが遅かった。

（……ヤバい）

不覚にも空中から鈴を間合いに入らせてしまった。双天牙月の斬撃が襲う。

僕は慌てて左手に近接ブレード〈ブレッド・スライサー〉を展開し斬撃を受け止めるが、鈴の方が圧倒的有利。双天牙月のリーチの長さと力でごり押し。機体が激しく揺れる。

ガキン。キン。キン

刃物が火花を散らすように重なり合う。

やはり接近戦はこちらが分が悪い。

たぶん、この試合は自分の間合いを制した方の勝ち。

僕は空中へと上昇し一度鈴から距離を取ることに…。

だが鈴がそれを追いかけてくる。

それも当然。

鈴の機体は近・中両用型なのだから。

「待ちなさいよ！シャルル！男らしくわたしと闘いなさい！」

鈴は相変わらずむちゃを言う。だからその接近戦が嫌なんだよ。

そこからは制空権と間合いの奪い合い。
端から見たらＩＳで空中を飛び回って遊んでるようにしか見えないが空中では高等技術のオンパレード。
しかしそれにしびれをきらした鈴が放つ。
『衝撃砲（龍砲）』
それは砲身も砲弾も目に見えない弾丸。
しかもこの衝撃砲は砲身斜角がほぼ制限なく撃てるようだ。
つまり真上真下はもちろん、真後ろまで展開して撃てる。
僕はそれを避けられるワケもなく直撃。
ズドォォォォ――ンッ！
まるで人身事故ように僕はアリーナの地面に勢いよく叩きつけられた。
（でも、まだだ。僕は諦めない。僕はまだ全ての力を出し切っていない！）
僕はすぐに立ち上がり鈴にプライベートチャンネルを使い真剣な眼差しで話しかける。
「鈴」
「なによ？」

「本気でいくからね」

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ格の違いってのを見せてあげるわよ！」

鈴は言葉を言い終えると先ほどから両手に持つ2本の双天牙月を連結させ1本の両刃のついた武器へと形状を変化させた。

そしてそれをバトンのように振り回しながら空中から急降下し僕めがけ一直線へ飛んでくる。

たぶんこれが最後の接触。鈴もそう思っているはずだ。

なら僕もチマチマ自分の距離だけで狙撃するのはやめだ。

『迎え撃つんだ！』

リヴァイヴ最強の一撃必殺でカウンターだ！

鈴がこちらへ向かいながら龍砲による攻撃を仕掛けてくる。

先ほどは避けられなかった龍砲を僕は後方へとギリギリ回避。

そしてお互いの攻撃が届く間合いに入った。

だがわずかだ。

鈴の双天牙月による斬撃が僕に触れるより前にこちらの攻撃がゼロコンマ数秒ほど早かった。

左手拳をきつく握りしめ叩き込むように突き出す。

リヴァイヴ最強の武器。

『盾殺し（シールド・ピアース）』
それが鈴の機体にピンポイントで炸裂。
ズガンッ！
「……クッ」
鈴は顔を苦痛に歪めた。シールドエネルギーによる絶対防御でも衝撃は抑えきれなかったらしい。
だが連射可能なこれをさらに続けざまに４発喰らわす。

ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

鈴はその衝撃で吹き飛びアリーナの壁に激突した。
それと同時にシールドエネルギーが０となる。
試合はこれにより終了した。僕の勝ちだ。
しかし、勝敗がついたというのに鈴は一向に起き上がらない。どうやらあまりの威力に鈴は気絶してしまったようだ。
「鈴！？しっかりして！鈴！り――――――――――――――――――――ん！！」
僕は鈴を抱え、ただただ気絶した彼女の名前を叫び続けた。

第１０話　夕暮れの約束♪（前書き）

またセシリアのキャラがえらいことに……

でも、そんなセシリアが俺は好きです。

今回は短めです。

俺の得意なギャグ路線。（スベっていることでしょう（笑））

でも楽しんで書けました。

短いので最後までどうぞ！

第１０話　夕暮れの約束♪

◇ここは静まり返った保健室。

あったかい。わたしの手を誰かが握ってる。でも身体がきしむように痛い。

鈴はゆっくりと目を開ける。そこには横たわる自分の手を握りしめたシャルロットがいた。

「…あれ？わたし、どうしてこんなところに？」

「…り、鈴が起きた！……よかった。ホントによかったよ」

するとシャルロットが泣きながら抱きついてくる。

ああ、そうか。わたしは負けたのか…と鈴は即座に状況を理解し始める。

「てか、さっきから痛いわよ！こっちはケガ人なんだから抱きつかないでよ。馬鹿！」

…ドキドキ

鈴は照れくささからつい怒ったふうに言ってしまう。シャルロットはソッと鈴から離れ謝る。

「ごめんね。ごめんね。僕が鈴を傷つけたんだ。僕のせいなんだ」

「……べ、別に怒ってないわよ。まあ、負けたのは悔しいけど試合のケガなんだから仕方ないでしょ！」

「ううん。やっぱり僕のせいだよ。ちゃんと責任とるから…」

「せ、せっ、せ…責任って！？」

鈴は顔を真っ赤にする。

「それはもちろん身の回りのお世話とかかな。ケガしてたら何かと大変でしょ？」

な、なんだ。そういうことか……わたしはてっきり『責任とるから結婚しよう』とかそういうことかと思ったのに……シャルルの馬鹿！ん？まてよ。わたしから約束しちゃえばいいんじゃ……？

まぶしい夕日が保健室のベッドを照らす中、普段らしからぬ女の子っぽさで鈴がシャルロットと約束をする。

「ね、ねえ。シャルル。そのさ…もし、わたしの料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？」

「うん。いいよ」

「ホ、ホントに？」

鈴の顔がパァァァと明るく笑顔になる。

だが、シャルロットには何故『毎日酢豚』？という疑問が湧く。

※注意　鈴はシャルロット（シャルル）を男と思っています。

そう。2人のこの約束は成り立っていなかった。

鈴のこの約束の意味とは『毎日味噌汁を～』に似た告白もしくはプロポーズに近い言葉だった。

しかし、性別を偽っているのに自分が男として見られている自覚がない。そんなシャルロットからすれば、料理の腕が上がったら鈴がご馳走してくれるんだ。鈴ってホントいい友達…程度の認識。

つまり2人の約束はまるで成立していない。

そうとは知らない鈴は…

（えへへ……もう、これってＹＥＳってことよね？わたしとシャルルは両想い…）

鈴は再度顔を真っ赤にして俯き、なんだか1人にやにやしている。

そこへセシリア登場。

「入りますわよ。あら、鈴さん目が覚めましたの？一生目が覚めなくてもよろしかったのに……」

そう言ったセシリアの手にはノコギリやカナヅチなど大工道具もとい凶器がある。

「あんた何縁起悪いこと言ってんのよ！それとその手に持ってるモノは何？あんた、わたしをどうする気？」

「いえ、大したことじゃありませんことよ。例えば抜け駆けしてて

ムカついたとか今なら弱っててトドメをさせるとかそんな理由じゃありませんことよ。ねえ、マイナスAカップの鈴さん」

凶器を構えるセシリア。

カチン。鈴は当然ブチ切れた。

「誰がマイナスAカップよ！それと何あからさまな嘘ついてんのよ！わたしを殺す気？殺されてたまるかぁ！！！」

その後2人はもみくちゃの大乱闘。

僕は呆れて保健室を出て行った。

そもそもセシリアってあんなキャラだっけ？

なんか黒いモノを感じる。

自室に戻ると部屋で箒が待っていた。

「おかえり、シャルロット。どうだった。鈴の容体は？」

「多分もう大丈夫だよ。さっきも暴れてたし。でも僕は鈴をあんな酷い目にあわせちゃった」

シャルロットはうるうるとまた泣き出しそうになる。

そんなシャルロットを箒が慰める。

「あまり自分を責めるな！あれは試合の出来事だ。先生方も言っていただろう。事故みたいによくあることだと…」

「ほ、箒っていつも優しいよね。ありがとう」

シャルロットは力いっぱい箒に抱きついた。照れはあるが箒もまん

ざらでもなく嬉しい。

そんな2人だけの時間は徐々に過ぎていった。

第１１話　お買い物♪（前書き）

俺の説明不足のせいで感想覧よりいくつか質問があったので補足です。

一夏はこの作品に一応存在します。
出さないとは書きましたが、それはＩＳ学園の生徒としては出さないという意味です。
あと一夏はシャル、箒、鈴、とは全く接点がありません。
つまり小学校、中学校ともに違います。
なので、箒との剣道のくだりや鈴の酢豚の約束自体もありません。

設定は俺のその場の思いつきで色々変えてます。
ややこしくて面倒臭いかも知れませんが、どうかお付き合い下さい。

第１１話　お買い物♪

◇クラス対抗戦も終わり僕達は落ち着いた日常へと戻る。
ちなみに一応僕が優勝したのだが鈴のこともあり授賞式などはなく、
そのままうやむやとなった。
本当なら優勝者のいるクラスには商品としてデザート１年分の券が
貰えたのだがそれも後日とされた。
僕としてはそれだけが気になるところです。
そんな今日は箒と駅前へショッピング。

「おい、いくぞ！シャルロット」

「待ってよ。あんまり急かさないでよ」

そう言った箒は手ぶらです。普通女の子ならカバンの１つぐらい持
つでしょ？箒ってやっぱり男の子みたい。
そんなこんなで僕達は駅前のショッピングモールに到着。
ここには多彩なものが売られている。
鈴いわく『ここで無ければ市内のどこにも無い』

「ねえ、ところで箒から買い物に行こうって誘ってくれたけど箒は
何を買いたいの？」

「そ、そのだな。最近また少し胸の辺りが苦しくなってきてだな」
そう言うと箒は恥ずかしげに自分の胸を抱くようにおさえた。

「あっ！なるほど。またオッパイが大きくなったんだね。それで新しいブラジャーを……」

ドカッ！！

シャルロットが最後の言葉を言いかけた瞬間に箒のげんこつが頭に炸裂。

「痛～い。箒が頭叩いた。ヒドい！」

「お、お前が恥ずかしいことを言うからだ！」

箒はどうやら胸が大きいことをコンプレックスに思ってるみたい。僕は普通に羨ましいけどなぁ。よし！ここは自信がつくように褒めてあげよう。

「あ、あのね。あんまり気にしない方がいいよ。気にすると逆にかえって他の人も気になっちゃうもんだし…」

「そ、そうなのか？」

「うん。それに僕は胸が大きいのは箒の魅力の１つだと思うよ。そう、まるで……」

「…まるで？」

「まるで牛さんみたいで素敵だよ」

ドカッ

またもシャルロットに箒の重いげんこつが炸裂。

「そんなことだと思ったわ！！ふんっ」

痛みで頭を押さえた僕は箒に引きずられるように下着売り場に連れていかれる。

何で怒ってるんだろう？褒めたんだけどなぁ。

店に入ると僕は早速箒に似合うブラを探す。

「ねえねえ、箒。コレなんてどうかな？」

僕が手渡したのはアダルトなレースの付いた黒のブラジャー。

「却下だ！」

「え～！きっと箒なら似合うよ」

「私はそんな大胆でアダルトなもの着けない！」

「でも箒のデカさじゃ可愛いのあんまりないよ」

「わかっている。そんなことは！」

女の子とは難しい生き物なのです。ちなみに僕はブラなんて普段着けてません。

だって胸を平らに見せる特殊なコルセットをしているからね。

この後僕らは数時間におよんで箒のブラを選んで購入し近くのレス

トランで昼食をとることにした。

「うん♪美味しい」

僕は大満足。

ちなみに頼んだメニューは僕がステーキセットで箒がハンバーグセット。

「まあまあだな」

「え～、美味しいよぉ。じゃあ箒のハンバーグも一口ちょうだい。あ～ん」

「な…何を甘えている？こんなところで恥ずかしいではないか！」

店内の誰かに見られるという恥ずかしさから箒は拒むものの結局僕の強引な押しに負け渋々食べさせてくれることになった。

「ほっ、ほら、いくぞ！その…はい、あーん」

「……あーん」

パクリ

「うん。こっちも美味しいね。じゃあ次は箒の番だよ。はい、あーん」

「わ、私もするのか？」

箒は照れつつもやってくれる。

「あ、あーん」

「どう？」

「ああ、う…美味いぞ」

「そっか。良かった。あっ！…口にソースついてるよ」

そう言うと僕は箒の口元をティッシュで拭いてあげた。また若干箒は照れている。もう可愛いなぁ。

食事を済ませた僕らはショッピングモールで買い物を続ける。するとそこへ知らないチャラそうな男の人が話しかけてくる。

「ねえ、カ～ノジョ！俺と遊ばない？」

多分ナンパだ！僕は正直こういうのが大嫌い。

「結構です。急いでいるので！」

そう言うと僕達は急ぎその場を立ち去ろうとする。

だが、男はそれぐらいでは諦めない。僕達の通り道をふさぐ。

「い～じゃん。遊ぼーぜ。2人とも可愛いしさぁ」

どうやら目の前のチャラそうな男には僕が女の子に見えるらしい。

まぁ女性用ではないものの私服を着てるし僕のことを知らないなら仕方ない。それに実際女の子だからね。

しびれを切らした男は強引に僕の腕を掴む。

「いいから来いよ」

僕はそれに腹を立てて男の腕をねじ曲げて地面に投げ飛ばす。

ドカッ！

「馴れ馴れしく触らないで下さい」

そしてそれに男はキレてしまった。

「痛えな！クソ女！ぶっ殺してやる！」

男は立ち上がりこちらへ向かってくる。

僕は身構えた。

そんなとき目の前の男とは別に高校生らしき男の子がやってきた。

「おい、やめろよ！その子達嫌がってんだろ！」

「んだ、テメーは？」

「ただの通りすがりだ！それより女の子に暴力はやめろ！」

「うるせい！外野は黙ってろ！」

するとチャラ男は男子高校生に殴りかかる。

だが、待っていたぞ！とばかりの男子高校生によるカウンターパンチがチャラ男の顔面に炸裂。

１発ＫＯ。

チャラ男は倒れて動かない。

僕は助けて貰ったことにお礼を言う。

「あ、あの……助けてくれてありがとう…ございました」
僕はスッと頭を下げる。男子高校生は言う。
「気にするな。俺はああいうのが許せないだけだから」
言葉を終えると男子高校生はその場を去っていった。
（かっこよかったな。たしかあれって藍越学園の制服だよね？）
僕は先ほどの彼を思い出しボーっとしてしまう。
「…クソッ！出遅れた。あんな男の1人や2人私が相手をしてやったのに」
なぜか箒は悔しそうで少し残念そう。もしかして僕のことを助けたかったのかな？
……なんてね。

時刻も夕方をむかえ僕達は学園に帰ることにした。電車で学園に向かう。ガタガタと揺れる車内。僕は眠気に襲われ途中で眠ってしまった。
そのまま箒の肩にもたれるように寄りかかる。
「おい！？」
箒はシャルロットに話しかけるが起きない。
やれやれと言った感じで箒はシャルロットに肩を貸してあげる。
（今日はシャルロットにふりまわされてばかりだったな。だがたま

には悪くない）

箒はそっとシャルロットの頭を撫でた。

ＩＳ学園到着まで２人はカップルのように仲良く並んで座席に座る。

そんな２人の『友情』には、まるで終着点がないかのようだった。

第１２話　風邪♪（前書き）

今回は、ほのぼのというよりギャグですね。楽しんで書けました。
こちらの方が俺らしい作品だと思っています。

作品についての疑問や矛盾点やダメ出しを心よりお待ちしております。
是非感想覧からどうぞ！
文章が多少支離滅裂なのは許してくださいね。
作者は文才０ですから（笑）

第１２話　風邪♪

◇仰向けに横たわる僕。視界には真っ白な天井が広がっている。
それになんだか身体がアツくて気だるい。
僕はどうやら風邪をひいてしまったようだ。
そんな僕を箒が看病してくれる。

「調子はどうだ？大丈夫か？シャルロット」

箒は仰向けに横たわるシャルロットの額に冷たいタオルを置く。

「大丈夫。ただの風邪だし寝ればすぐ治るよ。それよりごめんね。せっかくの休日なのに……」

「ああ、気にするな！」

今日は休日。
本当なら箒と２人で遊びにいく予定だったのに……ついてないや。
それと本音を言うと正直大丈夫じゃないかもしれない。先ほど自分の体温を計ると４０℃近くの高熱がでていた。
それになんだか意識が朦朧としてくる。

「そうか。じゃあ、お前が寝るまで私がそばにいてやる。だから安心して寝ろ」

「うん。ありがとう」

箒が近くの椅子に腰掛けて僕を見守っている。僕はそれに安堵しそ

のまま深い眠りへと落ちていった。

僕は夢をみた。

そう、あれはたしかまだ幼い僕がお父さん（義）の仕事を理由に日本へ移り住んだ頃の話だ。僕は日本に住まうことになり突然、日本の小学校へ通うこととなった。そんな小学校入学から僕を待っていたものは『イジメ』。

その時の僕はまだ日本語が上手く話せず共通言語をもっていなかった。

そんな些細なことを理由に僕はイジメの的にされてしまった。

「なんだよ！こいつ！日本語喋れないのかよ！外人だ」

「マジきもい。それに金髪じゃん。」

僕は数人の男の子にからかわれイジメられた。酷いときには叩かれたりもした。他の子はそれを見知らぬふり。僕が一体何をしたのだろう？日本語が話せないだけ、ただそれだけなのに……

そこへ助けに入ったのがポニーテールの女の子。そう、箒だ。

「おいっ！や、やめろ！そいつがお前等に何をした？」

そんな箒の身体は少し震えていた。箒も数人の男の子を前に少し怖かったのだろう。

「うっせーよ！男女は黙ってろ」

カチンッ！

その言葉に箒は怒り爆発。その後、数人の男の子相手に大暴れした。
そんな女の子なのに強くて格好いい箒に僕は強く惹かれた。
そして思った。

（僕も彼女みたいな強くて格好いい女の子になりたい）

それを理由に僕は箒に付きまとうようになった。そして、いつしか
僕達は友達と呼べる間柄となった。

それから数年後に起こったＩＳの発表。
そのＩＳ発表を境に僕達は離れ離れとなってしまった。

ここまでが僕と箒が出会った経緯。

はたして僕は彼女に出会い理想の強くて格好いい女性に少しでもな
れたのだろうか？

僕は昔のことを思い出しハッと目が覚めた。

（なんだ、夢か……それにしても幼いときの箒はやっぱり可愛かっ
たなぁ）

そう思って周りを見渡すが箒がいない。

（あれ？トイレかな？）

バタンッ！

そこへ扉が開いた。だが、やってきたのは箒ではなくナース姿のセシリアだった。

「風の噂で訊きましたわ。シャルロットさんの看病はこのわたくしセシリア・オルコットにお任せください」

ズカズカとセシリアが自室に入ってくる。

僕は関わりたくないので寝たふりもとい死んだふりをする。

「あらあら、寝てらしたの？それは仕方ありませんわね」

そう言うと、にやりと不気味な笑みを見せてセシリアは横たわる僕の布団を引っ剥がす。そして僕の上にまたがりなにやら自分の服を脱ぎだした。

セシリアは何がしたいの？…ま、まさか僕を襲う気？でもセシリアは僕を女の子と知ってるはず。

僕はおそるおそるセシリアに話しかける。

「あ、あのセシリアは一体僕の上で何をしてるのかな？」

「いやですわ、起きてましたの？もう、意地がお悪い方ですわね」

「えっと…それより退いてくれないかな？僕まだ病人だし重たいから」

セシリアはふふんっと不敵な笑みを見せる。

「どうやら勘違いしてますわね。これは風邪を治すための看病です

わ。訊いたことありませんの？人肌で温め合うと風邪は早く治ると」
訊いたことないよ。僕の生きてきた１６年間が間違ってたの？そんなわけがない。
「そ、そんなの絶対嘘だよ。だってそんなの訊いたことないもん」
「はい。嘘ですわ♪」
なんで嘘つくの？
少し信じちゃったじゃないか！
僕の純情を返してよ！
「わたくしはアナタを抱ければそれでいいのですわ。さあ、身体の力を抜いてくださいましシャルロットさん」
やっぱりか。嫌！嫌だ！レズはいやだ～～～
僕は必死に暴れて抵抗する。だが病気で横たわる僕には上手く力が入らない。
そんな僕にセシリアは馬乗り状態。そのまま僕の両手をロープのようなヒモで縛る。セシリアは下着姿。セシリアからすればもう準備は万全。
「やめて。僕達友達でしょ？こんなのよくないよ…ね？」
そう言った僕の目は涙目状態。
そんな僕の姿を見てセシリアはますます興奮する。
「いい、いいですわ。ますます好きになりましたわ。でも大丈夫ですわ。『愛』に性別も国境も関係ありませんから」

関係大有りだよ。
特に性別の辺りが！
そしてセシリアの唇がだんだんと近づいてくる。シャルロットがもうダメかと諦めかけた。
そんなとき箒が自室に帰ってきた。
「少し私が目を離せば……貴様は一体この部屋で何をしているんだ？」
「それはもちろん愛の再確認で…グハァッ」
言葉の途中で箒の右ストレートがセシリアの顔面にきまる。
そしてセシリアからお嬢様らしからぬ声があがる。
今『グハァッ』って言っちゃったよ！もはやお嬢様としてじゃなく1人の女の子としてダメだよ。
「出ていけ！この変態が！2度とこの部屋に入ってくるな！」
そう言うと箒はセシリアの首根っこを掴み強引に部屋から引きずり出した。
ちょっと可哀相な気もするけど自業自得ってやつだよね？
「すまない。シャルロット。次からは鍵を閉めていく」
「うん、お願いするよ」

僕は「あははは」と苦笑いをする。

どうやら僕の風邪はしばらく治りそうにありません。

第１３話　転校生現る♪（前書き）

超短いです。
特に今回は中途半端で終わらせました。
毎度ですがスイマセン。
そろそろあの人を出しておこう。
まあ、誰かはわかるでしょうが、今回はそういうお話です。

第１３話　転校生現る♪

◇風邪が治った僕は今日も変わらず学校へと通う。今は朝のＨ・Ｒ中。教壇に立つのは副担任の山田真耶先生。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！」

「え……」

「「「えええええええええっ！？」」」

いきなりの転校生紹介にクラス中がいっきにざわつく。そりゃそうだよね。僕らは噂が大好きな十代乙女なんだから。

その情報網をかいくぐっていきなり転校生が現れたんだから驚きもする。

でも僕が気になるのはそこじゃない。

このＩＳ学園に転入するにはかなり条件が厳しいはず。試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになっている。つまりこんな時期に転入してくるその子は鈴と同じく間違いなく専用機持ちで実力者。一体どんな機体を持っているんだろうか？

（そもそも、なんで僕らのクラス……？すでにこのクラスには僕とセシリアの２人も専用機持ちがいるのに。普通他のクラスに分散させるものじゃないのかな？）

「では、どうぞ」

ガラリと扉を開けて教室に入ってきた人物は見た目からしてかなりの異端であった。輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを、腰

近くまで長くおろしている。それは綺麗ではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしという印象。
そして左目に医療用ではない、黒い眼帯。開いている方の右目は赤色を宿しているが、その温度はかぎりなくゼロに近い。
印象は言うまでもなく『軍人』。身長は一般の女性よりやや小柄な部類。

「えっ…えーと……自己紹介をお願いします」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ！」

「あ、あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ！」

山田先生はなんだか少し脅えている。それもそのはず、このラウラという子からは重く冷たいオーラが放たれているのだから。それになんだか怖くて近寄りがたい感じだ。先ほどまでざわついていたクラスメイト達もその重く冷たい雰囲気から静まりかえる。自己紹介を終えたラウラは黙って席へと座る。

「で…では授業を始めたいと思います。教科書のＰ６３を開いて下さい」

いつもと変わらず授業が始まる。
そんなとき、僕はラウラのことが気になった。彼女は昔の僕に少し似ているのだから。
どこが？と訊かれたら困るけど、どこか孤独で他人を寄せ付けない。
そんなラウラがみんなと打ち解けられるように手助けをしたい…僕はそう思ったんだ。

――昼休み。
僕はずっと遠目で彼女を観察していた。昼休みまで休み時間を何度かはさんだが近寄りがたく誰も彼女に話しかけるものはいなかった。ラウラは1人教室を出て行く。

（昼食は1人で済ませるのかな？　）

僕はコッソリと尾行する。すると中庭の方へと出て行った。あれ？どうやら誰かと話をしているようだ。そこには織斑先生の姿が……

「なぜこんなところで教師など！」

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

僕は驚いた。あの氷のようなボーデヴィッヒさんが、ああまで声を荒げているというのは他にないだろう。話の内容はどうやら織斑先生の現在の仕事についての不満や思いの丈をボーデヴィッヒさんがぶつけているようだった。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません。意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間をさか

れるなど――」

「そこまでにしておけよ、小娘」

凄みのある千冬の声。さすがのラウラも、その声に含まれる覇気にすくんでしまった。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

「もういい……話は終わりだ！いけ」

ラウラは黙したまま早足で去っていった。

「そこの男子。盗み聞きか？」

織斑先生は木の陰に隠れていた僕に気づいていた。

「…いえ、僕は決してそんなつもりは」

「では、異常性癖か？」

「なんで、そうなるんですか！！もうっ、からかわないで下さい。僕は彼女の様子がちょっと気になっただけですから」

千冬はほくそ笑む。

「まあ、気になるならちょうどいい。あいつのことを頼む。これか

ら色々と面倒なことが起きそうだからな」

「…は、はい」

そう返事をするとシャルロットはまたラウラを追いかけていった。

だが、このときの僕には織斑先生の言った意味など、まるで理解していなかった。

この後あんなトラブルが起こるなんて……

第１４話　シメよう♪（前書き）

今回の話はなんか色々矛盾があるような気がします。
人の心理とは難しいものですね。
自分でも書いててよくわからない（笑）
頑張って理解してください。

第１４話　シメよう♪

◇千冬と話をした後ラウラは屋上で１人昼食をとっていた。そこへシャルロットがラウラを追いかけ屋上へとたどり着く。

「探したよ。ボーデヴィッヒさん。お昼一緒に食べよう」

シャルロットはラウラに笑顔で話しかける。

「……断る！」

だがそんな言葉などお構いなしにラウラの隣へと座る。

「誰が一緒に食べるといった？貴様、殺されたいのか！」

ラウラからは強い殺気が放たれる。誰にも深く干渉されたくない。１人でいたい。それはそんな意味を込めたものだった。

だがシャルロットはその程度では決して屈しない。むしろ「えへへ」と嬉しそうに笑う。

（ボーデヴィッヒさんが初めて話してくれた！）

「……」

「ねえ、それ美味しいの？」

シャルロットはラウラが売店で買ったであろう、お弁当を指差す。

「……」

「無視はヒドいなぁ」

「……」

「じゃあ、織斑先生の話しよっか？」

するとラウラはその言葉に怒りポケットからサバイバルナイフを取り出した。そしてそのナイフをシャルロットの首筋に突きつけるように構える。

「貴様に！！……貴様にいったい教官の何がわかるというんだ！？あの人だけが私を理解してくれているように私だけがあの人の理解者だ！２度と馴れ馴れしくあの人の話をしようとするな！！」

そう言い終えるとラウラは突きつけていたナイフをしまい、どこかへ行ってしまった。

ああっ、怒らせちゃった。でもやっと少しわかったよ。僕とボーデヴィッヒさんとの共通点。それと僕が彼女を気にしていた理由。

きっと辛くて寂しいんだよね？僕が昔そうだったように……

彼女は少しだけ僕に似ている。

僕も小学校に入学した当時は友達なんて呼べる人は誰もいなかった。そんな僕はイジメられてしまった。もし、あのとき箒が助けてくれなかったら僕はずっと１人ぼっちだったはず。でも今は違う。今度は力になれる側にいるんだ！

たしかにラウラには織斑先生がいる。

けどそれじゃ、きっとダメなんだよ。生徒と教師じゃ同じ立場に立

てない。
そう、同じ立場で同等の力を持つ人間じゃないと…。だから僕が彼女の支えになる。
僕が彼女を『孤独』から救ってみせる。
昔、箒が僕にそうしてくれたように……

――教官。あなたのその絶対的強さ。それは私の存在理由。あなたが帰ってきてくださるために私は……。

一方教室では。

どうやら先ほどのシャルロットとラウラとの一件が伝わりクラスでは大騒ぎになっているようだ。

「今の話本当？」

「本当だよ。私、偶然見ちゃったんだ。屋上でデュノア君があのボーデヴィッヒさんにナイフで襲われかけた所を…」

そこへ現れたのは2組のはずの鈴。

「今のそれ本当なの？」

「本当だよ。間違いない」

シャルロットのクラスメイトは答える。
「許せない！！シャルルにそんなことするなんて！どこのどいつよ！シメてやる！」
怒りに燃える鈴。
そこへセシリアも現れる。
「たしかに許せませんわ。わたくし以外にシャルロッ……いえ、シャルルさんを襲うだなんて！！もしかして、あんなことやこんなこと……はたまた、そんなことまで…」
セシリアは恥ずかしげに顔をだんだんと赤くする。それもそのはず、彼女は『襲う』の意味を全く違う意味にとらえているのだから。クラスメイトの女の子達は呆れ顔で彼女を見守っている。
果たしてセシリアの明日はどっちだ！？

――第二アリーナ。
鈴とセシリアの2人は第二アリーナへラウラを呼び出した。
「何のようだ？」
突然呼び出されたが腕を組み余裕を見せるラウラ。だがその目にはどこか殺気がこもっている。
「言わなくてもわかるでしょうが！！シャルルを傷つけようとする

やつは誰だろうと許さない！わたしがシメてやる！」

「そうですわ。シャルルさんの下着は何色でしたの？白？赤？もしくは黒？わたくしにも教えなさい！」

２人は怒り狂う。

だが何かが違うセシリア。彼女は馬鹿なのだろうか？

「フンっ！そういうことなら手間が省けた。いずれこちらからいくつもりだったからな」

「あいつスクラップがお望みみたいね。セシリア、どっちが先やるかジャンケンして決めるわよ」

ラウラは不敵な笑みを見せる。

「何を言っている？早くふたりがかりでかかってきたらどうだ？１＋１は所詮２にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

それは明らかな挑発だったが、堪忍袋の緒が切れたふたりはもはや止まらなかった。

「今なんて言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「場にいない人間の侮辱までするとは、恥ずかしい人ですわね。やはり少々懲らしめる必要がありますわ」

ラウラはＩＳを展開し身構える。

「とっとと来い」

「「上等」」

2人は数秒とかからずISを展開。そこには『甲龍』と『ブルー・ティアーズ』の姿があった。立ちふさがるはラウラの専用機『シュヴァルツェア・レーゲン』。

「くらえっ」

ジャカッ！とIS『甲龍』の両肩が開く。そこに搭載されている第三世代型空間圧作用兵器・衝撃砲《龍砲》の最大出力攻撃である。訓練機のアーマーならおそらく一撃で沈められるであろうその砲撃を、しかしラウラは回避をしようともしない。

「無駄だ。このシュヴルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

衝撃砲の不可視の弾丸がラウラを目指す。――が、その攻撃はいくら待っても届くことは無かった。

「くっ！噂には聞いてたけど、まさかこうまで相性が悪いだなんて…」

ラウラは右手を突き出しただけで衝撃砲を完全に無力化した。それはまるでバリアーのようなものだった。

ラウラが起動したもの、それは対象の周辺空間に慣性を停止させる領域を展開し、その動きを封じることができる。

通称AIC（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）。

別名「慣性停止能力」ともいわれている。

さらに先端に刃がついたワイヤー。通称『ワイヤーブレード』が肩部と腰部から計6本射出される。
それが空中に飛翔した鈴の右足に絡みつく。

「させませんわ」

すかさず鈴の援護のため射撃を行うセシリア。同時にビットを射出、ラウラへと向かわせる。
セシリアの精密な狙撃とビットによる視界外射撃。
その両方をかわしながら、ラウラはさっきと同様右手を突き出しビットの動きを全て封じ込める。

「動きが止まりましたわね！」

セシリアは手に持っているスターライトmk？の銃口をラウラに向ける。

「貴様もな」

ラウラはセシリアの狙撃より先に先程ワイヤーで拘束した鈴をセシリア目がけて叩きつけた。

「「きゃああっ」」

2人はぶつかり転倒する。加えてラウラは右肩にある大口径リボルバーカノンを2人に放つ。

ズドオオオオオン

アリーナには激しい爆音が響き黒煙があがる。
ここからは見るに耐えない一方的な暴虐だった。
シールドエネルギーが大きく削られたものの、なんとか立ち上がる2人。そんな2人をワイヤーブレードで身体ごと捕まえてラウラは自分の元へとたぐり寄せる。

「あああああっ」

身動きがとれない2人。
その腕に、脚に、体にラウラの拳が叩き込まれる。2人のシールドエネルギーは無くなり機体維持警告域〈レッドゾーン〉を超え、操縦者生命危機域〈デッドゾーン〉へと到達した。
しかしラウラは攻撃の手を止めない。ただ淡々と鈴とセシリアを殴り、蹴り、ＩＳアーマーを破壊していく。

（この程度の奴らが代表候補生？笑わせるな！こんな弱い奴らなど教官が教えるに値しない。なのに貴様らがいるから教官は帰ってこないんだ。だがそれも今日までの話だ。私が学内最強だと立証されれば、きっと教官も自分の過ちに気づき我が祖国ドイツに帰ってくださるはず……）

ラウラの勝手極まりない理不尽な暴力。これ以上は2人の命に関わる。
そんなときシャルロットがやってきた。

「2人を離せ！！」

身体にはすでにリヴァイヴが展開されており身にまとっている。
ラウラはワイヤーブレードから2人を離す。すると意識がない2人

は糸の切れた操り人形のように倒れＩＳは粒子化して消えた。

「フンッ！そういえば貴様も専用機持ちだったな？フランスの時代遅れの第二世代型か……話にならんな」

「なんで……なんでこんなことするの？酷いよ」

「知れたことを！教官が帰ってこないからだ。あの人は貴様ら平和ボケした人間に構うほど暇じゃない。なのに教官は貴様らクズの相手をしたがる。だから私がわからせるんだ。私が『学内最強』となり貴様らは教えるに値しない人間だったということを！！」

話を聞き終えると今までないようなキツい眼差しでシャルロットはラウラを睨んだ。

「違う、それは違うよ。ただ、それはぶつけようのない不満や怒りの矛先を他人に向けているだけだ。文句があるなら何度でも織斑先生に直接言えばいい」

ラウラは眉をピクピクとひきつらせ眉間にしわが寄る。

「それが出来ないキミは『誰よりも弱い』」

「……貴様ああああああああああああああああああああ」

ついにシャルロットＶＳラウラが開幕。

果たして結果はいかに……

第１５話　過去との決別♪（前書き）

ついにＰＶ２００００突破。おめでたい。感動の極みです。
ちなみにＰＶとは総合アクセス数みたいなものですよ。
読んでくださった方々どうもありがとうございます。
これからも細々と頑張ります。
ただプライベートが忙しくなってきたので投稿がやや遅れます。その辺はお許しを！

第１５話　過去との決別♪

◇「……この私が誰よりも弱いだと！！？ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ラウラは自分を侮辱された怒りで我を忘れ大口径リボルバーカノンをシャルロットめがけて連射する。

だが、そんな怒りにまかせた攻撃など当たるわけが無い。シャルロットはその弾丸をなんなく全て回避し瞬時加速〈イグニッション・ブースト〉を発動。

すかさず気絶した鈴・セシリアの元へと向かう。２人を抱きかかえ安全なところへ避難させるとシャルロットはアリーナ中央へと戻る。

そこに待っていたのは先ほど頭に血を昇らせていた彼女ではない。彼女の異名…『ドイツの冷氷』と呼ばれるに相応しい、冷静、冷血な、そんな彼女だった。

「フンッ！私の砲撃を回避するとは少しはやるようだな。おかげで頭に昇った血が降りた。だが私を侮辱したことは絶対に後悔させてやる！」

言葉を言い終えるや否ラウラは機体の肩部と腰部から計６本のワイヤーブレードを僕めがけて射出する。

僕は高速切替〈ラピッド・スイッチ〉で瞬時に５５口径アサルトライフル〈ヴェント〉を展開し両手で構える。

そしてワイヤーブレードの先端にある刃をアサルトライフルで狙撃。

クネクネと予測のつかない妙な動きをするワイヤーブレード。その

先端を確実に狙い次々と撃ち落としていく。そんな中僕は捕まってしまった。

シュヴァル・レーゲン最大の切り札……その名も『ＡＩＣ』。

……その空間停止能力の力によって。

（まったく身動きがとれない。…しまった！）

そう、ラウラはワイヤーブレードをおとりに使ったのだ。その間に瞬時加速〈イグニッション・ブースト〉を使用しシャルロットに近づいた。

「…消し飛べ」

ＡＩＣにより身動きが取れない僕にレーゲンの大口径リボルバーカノンが火を噴く。

ズドオオオオオオオオ――――ン

直撃だった。

僕はそのあまりの威力に吹き飛ぶ。シールドエネルギーもごっそり奪われた。

「やはり第二世代型程度ではその程度か……。やはり私が正しいんだ。強さこそ全てだ！」

「違う！！！」シャルロットはラウラの言葉を否定しなんとか立ち上がる。

「キミはそうやって力で！暴力で！言葉を正当化しているだけだよ。本当に大切なものはそんなものじゃない！」

「負け犬がああああ！！！調子にのるなあ！！！」

ラウラは再度ＡＩＣを使用しシャルロットの身動きを封じようと試みる。

それが分かっていたシャルロットは後方へ一気に移動。

（もう僕にその手は通じない。それにＡＩＣの致命傷な弱点もわかったよ）

なんとシャルロットは１度受けただけでＡＩＣの弱点に気づいてしまったのだ。恐るべき洞察力。

ＡＩＣとは対象となる物体の身動きを完全封じ停止させる空間を創り出す兵器。だが、それには致命傷な弱点がある。対象物に意識を集中させていないと効果を維持出来ない。

つまりＡＩＣを使う時は集中を要するため隙だらけ。

シャルロットは前方に６１口径アサルトカノン〈ガルム〉による爆破弾の銃弾を浴びせた。

「ちっ！……」

いくつか弾が被弾するが、ラウラはまたＡＩＣを使用し弾丸を止めて見せる。すぐさまリボルバーカノンで反撃に転じようするが、すでにラウラの視界にはシャルロットがいない。

（どこだ！？）

そう思った瞬間、背中に銃弾を浴びる。

「くそっ…小癪な！」

シャルロットは瞬時加速〈イグニッション・ブースト〉を使い後方へと先回りしていたのだ。続けざまにすでに展開していたマシンガンとショットガンを発砲。ラウラがこちらを向きＡＩＣで弾丸を防ぐ。

僕はすぐさま避けきれないほどの多量の弾丸をラウラに浴びせて瞬時加速〈イグニッション・ブースト〉を使用し後方へと周り込む。

またも後方より避けきれないほどの連射射撃。

その際ラウラはこちらを振り向きＡＩＣを使うざるを得ない。避けきれない弾数なのだから。

ラウラ攻略方。

それは前方からの多量攻撃による陽動。そしてそれを防ぐためＡＩＣを使用した彼女への奇襲による視覚外攻撃。

偶然だが最初に厄介なワイヤーブレードを破壊したことは幸運だったといえるだろう。

逆に言えば、もし厄介なワイヤーブレードを破壊していなければこんな策は通じなかったとも言える。

主力武器はワイヤーブレードとリボルバーカノンにＡＩＣ。

２つはほぼ完全に封じた。あとはリボルバーカノンにさえ気をつければ怖くない。

だが、この作戦も完璧なものとは言えない。

いち早くＡＩＣの届かぬ死角に回り込むため瞬時加速〈イグニッション・ブースト〉を多量に使用しエネルギーを激しく消耗しているのだから。そのことにラウラも気づいていた。

（（次が勝負所だ！））

再度シャルロットは弾丸を放ち瞬時加速（イグニッション・ブースト）でＡＩＣを使用したラウラのがら空きな側面へと回り込む。

「この程度で勝った気になるなぁぁぁ！！」

急ぎラウラは僕のいる側面へと大口径リボルバーカノンを構える。僕はその瞬間、アサルトライフル〈ガルム〉による爆発弾をピンポイントでリボルバーカノンの銃口に撃ち込む。

するとリボルバーカノンは内部より拡散して爆発した。

そのとき初めてラウラの表情に焦りが見えた。それは文字通り必死の形相だった。

なぜならシャルロットの表情から次に勝負をしかけてくる攻撃が予想できたからだ。

「「おおおおっ！」」

２人の声が重なる。しかしラウラの必死な抵抗も虚しく……リヴァイヴ最大の主力武器『盾殺し（シールド・ピアース）』が直接ラウラの機体に叩き込まれた。

ズガンッ！

ズガンッ！

ズガンッ！ズガンッ！

意識が遠のいていく。

――何故だ！

何故私がこんなやつに圧倒される！？

確かに相手の力量を見誤った。それは間違いようのないミスだ。しかし、それでも私は負けられない！負けるわけにはいかない……！

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初につけられた記号は――遺伝子試験体Ｃ－００３７。

人口合成された遺伝子から作られた、私はそんな存在だった。

―暗い。暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのためだけに作られ生まれ、育てられ、鍛えられた。知っているのは人体を如何に破壊するかという知識。格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は中でも優秀で高く評価されていた。

それがある時、世界最強の兵器――ＩＳが現れた世界は一変した。

その適合性向上のために施された処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージェ』―それは疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。そしてまた、その処置を施した目のことを『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』と呼ぶ。

危険性はまったくなく理論上の上では、不適合も起きない—はず、だった。しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。
この『事故』により私は部隊の中でもＩＳ訓練において遅れを取ることとなり、いつしかトップの座から転落した。私を待っていたものは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

私は闇からより深い闇へと止まることなく転げ落ちていった。

そんな私が初めて目にした光。それが教官との織斑千冬との出会いだった。
ただあの人の教えを忠実に実行するだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

そして私はあの人に強烈に、深く、憧れた。あの人のようになりたい。

だがそんなある日、教官が日本に帰国すると訊かされた。
それもＩＳ学園の教師になる、などというくだらない理由で……。

ただただショックだった。何故教官のような素晴らしいお方が何故そんな極東の地へ。
そして、それはいつしか嫉妬、妬み、へと変わった。
許せない！私から教官を奪う人間が！
ＩＳ学園にいる全ての人間が！奴らを叩きのめせば教官はきっとまた戻ってくださるはず。

そして奴らを、代表候補生を名乗る人間を、ＩＳ学園の人間を痛めつけてやった。

これでいいんだ。
この世は弱肉強食だ。強い者が正義。強者こそ正しい。
私はそうやって今まで育てられずっと生きてきた。
これからもそれは変わらないはずだ。

……『違う！』。

なんだこの感覚は？
シャルル・デュノアに言われた言葉が脳裏に響く。
「強さとはそんなものじゃない。強さとは心の在処。その価値は、何と戦い、何を守ったかで決まる。キミは今まで一体何と戦い何を守ってきたの？」

同じ軍の兵士、強者、教官（織斑千冬）……全て違う。
私が今まで戦ってきたものは自分の心の中にある闇。

そう、『孤独』だ！

「だけどキミはその恐怖に途中で逃げ出してしまった。そして織斑先生を理由にして、ただ八つ当たりのように他人を傷つけた。それは本当の強さじゃない。そんなもので勝てたのかな？その『孤独』に！！それ以前に戦ってすらいないんじゃないかな？それは果たして『強い』と呼べるの？」

私は……私は……

「今は逃げ出したっていい、迷ったっていい。でも今度は一緒に戦おう！！もうキミは1人じゃない。僕や織斑先生、それに学園のみ

んながいる。だって同じ学園に通う仲間でしょ？」

……『仲間』？

そうだ！

私が本当に望んだものは『そんな自分よがりの強さ』でも『他人が傷つく姿を見ること』でもないんだ。

私が本当に望んだもの……それは『仲間』。

ずっと、心のどこかで欲した言葉だった。『私はそれを守りたい！！』

その言葉にシャルロットは安心したかのようにフッと微笑んだ。

第１６話　デレました♪（前書き）

ども。
えー！俺的にそろそろオリジナルストーリーを入れたいところですね。
早くこの作品独特の変態なセシリアを暴走させたい。
もしくは箒×シャルのほのぼのストーリーを描きたい。
そんな今日この頃です。
あっ！常に感想受け付けています。
もっと〇〇と××を絡ませて欲しいとかでもいいので良かったらどうぞ。
お待ちしてます。

第16話　デレました♪

◇夕日の光が彼女を照らす。その眩しさにラウラは突然ハッと目を覚ました。

なんだ！先ほどの意思を共通するような感覚は？
それに何故私はこんなところに……！？

ラウラがいたのは保健室のベッドの上。無理に体を起こそうすると全身に痛みが走る。その痛みにラウラは顔を歪めた。

「……クッ」

「やっと起きたか？全身に打撲がある。しばらくは動けないだろうから無理をするな！」

その声には聞き覚えがある。そう、自らが敬愛してやまない教官こと織斑千冬だ。

「私はいったい？」

「何も覚えていないのか？無断でアリーナを使って試合を行った挙げ句ケガをしたそうだ。治療を終えた他の3人には罰として今、始末書と反省文を書かせている。お前も後で覚悟しておけよ！」

現状を理解したラウラは深く俯く。
決して始末書や反省文を書くことがショックなのではない。
シャルロットに言われた言葉にラウラは自分がしてきた今までの過ちに気づいた。そして悔いていた。

私は孤独から逃れるため強さの象徴とも言える教官の強さにただ少しでも近づきたかった。
その結果はどうだ？
ただ他人を傷つけそれを己の強さなどと勘違いしていただけにすぎない。
目の前のものから逃げて戦ってすらいない。守ったものと言えば、くだらないプライドとちっぽけな地位だけだ。
あいつに言われた言葉の全てが胸に突き刺さる。
「反省しているならそれでいい。ラウラ・ボーデヴィッヒ」
いきなり千冬に名前を呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔を上げる。
「お前は誰だ？」
「わ、私は……」
言葉が喉まで出かかってはいるが何かが引っかかり邪魔をする。その続きが出てこない。自分がラウラあると、どうしても今の状態では言えなかった。
「誰でもないのならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学校に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」
千冬の言葉は意外だった。まさか自分を励ましてくれるとは思って

もみなかったラウラは何を言うべきかがわからない。わからないまま、ただぽかんと口を開けていた。
そんなラウラに千冬は言葉を続ける。

「そうだ。それとお前は私にはなれないぞ！これでも教師という仕事は苦労が絶えないんだ。お前みたいなのがいるからな」

千冬はニヤリと笑みを見せ保健室を出て行った。

完敗。
完膚無きまでの敗北。だが、それが今はたまらなく心地いい。
本当の強さとは何かを教わり自分の存在を認めてくれる人間が出来たのだから…。
もう私は1人（孤独）じゃない。もう迷わない。
そう、ラウラ・ボーデヴィッヒの人生はこれから始まるんだ。

翌日。
僕は何事も無かったかのように学校へと通う。
教室に入ると昨日の一件の元凶、ラウラが立っていた。

「おはよう、ボーデヴィッヒさん。あのね……昨日はごめんね。やりすぎちゃったっていうか…その…ケガさせちゃって」

僕は頭を下げて謝る。理由はどうあれケガをさせた僕が悪いのだから。

「ラウラだ！私のことはラウラと呼んでくれ！ケガのことなら気にしてなどいない。むしろ詫びる方は私の方だ。すまなかった」

あんなに敵意をむき出しにしていたラウラが素直に謝ったことに僕は驚く。
「うん。わかったよ、ラウラ。それより僕になんか謝らなくてもいいから、あの2人に謝った方がいいよ。根に持つから」
僕は冗談混じりにそう伝えておく。あのあと喧嘩の理由は2人に聞いた。僕のせいで不仲なのはやっぱり嫌だし仲直りして欲しいしね。
「ああ、あとでそうするとしよう。そ、そのだな……あれから私は色々考えたんだ。自分の在り方というものを。そして決めた！」
ん？突然何？
さっぱり話がみえないよ。
そう思った瞬間、僕はいきなり胸ぐらを掴まれラウラに引き寄せられ、あろうことか――唇を奪われた。
「ンン～！！？……はあはあ……」
「お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」
「えっと……お婿さんじゃなくて？」
僕は冷静にツッコミをいれてしまう。
いや…僕は女の子だから合ってはいるのか？ってそういう問題じゃないよね。
そもそもなんでラウラは僕にキスをしたの？
「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故にお前を嫁にする」

誰なの？ラウラに間違った知識を教えたのは！？

このやりとりを一部始終見ていたクラスメイトの女の子達が騒ぎ出す。

「きゃあああああ！今デュノアくんとボーデヴィッヒさんがキスしてた！」

「ウソ！ずるーい。デュノアくん！私にもチューして」

「私にもして～」

「そうだ！そうだ！デュノアくんはみんなの物だ」

押し寄せる女の子達。それもいつの間にか他クラス、他学年の生徒まで押し寄せてきた。

「ふーっ！ふーっ！ふーっ！シャルルぅ～！あんたいったい何してんのよ！」

「そうですわ。わたくしという愛人がいながら浮気なんてもってのほかですわ」

その押し寄せる大勢の中から怒りのあまり肩で息をしている鈴と相変わらず意味のわからないことを言うセシリアが現れた。しかも２人とも、すでにＩＳ展開済み。

「ぼ、僕は何もしてない。むしろ被害者サイドだよ。あはははは」

とりあえず僕は笑って誤魔化す。…が誤魔化しきれませんでした。

「「死ね～！」」

２人〈鈴とセシリア〉のＩＳによる攻撃が僕めがけて飛んでくる。
それをＩＳを展開したラウラがＡＩＣで防ぐ。

「私の嫁を勝手に殺されては困る！」

２人〈鈴とセシリア〉の怒りはさらにヒートアップする。

「何が嫁よ！あとから出てきて、ふざけんじゃないわよ！！」

「そうですわ。盗人猛々しいとはこのことですわね！それと昨日の一件でこのわたくしに勝っただなんて勘違いしないことね！」

ラウラは僕の唇を奪った余裕からか『フンッ』と鼻息をならす。

「文句があるならかかってこい！！」

「「上等よ」」

ズドドオオオオドオオオオオオオオオオ――――ンン

教室には激しい爆音が鳴り響く。この日１組の教室が崩壊しました。

第17話　1つの疑惑♪（前書き）

投稿スピード遅れてます。すいません。プライベートが忙しい。それと1つ気づきました。投稿していない日は極端にアクセス数少ない（泣）

ガビーン！

って古いか（笑）

第１７話　１つの疑惑♪

◇翌日。
昨日起こった３人〈鈴、セシリア、ラウラ〉による乱闘で１組の教室は見るも無惨なことになった。
その元凶の３人はというと千冬に散々怒られた挙げ句『１週間の停学処分』を言い渡された。
よって今日は校舎には来ていない。今も罰として寮にある懲罰部屋で反省文、始末書…ｅｔｃを書かされていることであろう。
さすがのシャルロットもこれには呆れていた。

今日も変わらず授業。今はちょうど休み時間中。
授業には普段使用されていない空き部屋（教室）が使われている。
僕は窓から外を見渡す。今日の空は雲１つなく晴れ晴れとしてとても天気がいい。

（うん。今日は天気だし屋上で箒と静かに昼食をとろう。早くお昼にならないかなぁ）

あの騒がしい３人がいないだけで校舎全体が平和そのもの。
だがこれは嵐の前の静けさに過ぎなかった。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド

まるで地震のような足音がするかと思えば僕の前に一直線で大勢の女の子一同が押し寄せてくる。パッと見て数えただけでも他クラスの女の子を合わせ３０人はいる。それが僕の席を覆い囲うように集まる。

「「デュノアくん！」」

「は、はい！」

僕は大勢の女の子に自分の名を呼ばれつい返事を返してしまうが、今の現状をさっぱり飲み込めない。何かのヤバい宗教団体なのだろうか？僕はその怖さから少し震える。いったい何がどうなっているの？

「「これ！」」

女の子全員が僕に向かって用紙を一枚差し出す。

（もし不幸の手紙とかラブレターだったらどうしよう！）

僕はドキドキしながら、とりあえず大勢の中から1人の紙を受けとる。

それには以下のような内容が記されていた。

【今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。】

「そういえば！！」

このことはＨＲで千冬から度々報告を受けていたのだがシャルロットはそのことをすっかり忘れていた。

『学年別トーナメント』。それは2人1組となりトーナメント形式

で行われるＩＳ試合のことであり１週間にも渡り行われる学園一大イベントの１つである。
行われる目的としては三年にはスカウト、二年には一年間の成果を確認するため。一年には今のところあまり関係ないが上位入賞者には早速チェックが入るといった名目も含まれている。

「と、言うわけだから私と組もう。デュノアくん！」

「いやいや、私の方がきっと相性いいよ！」

「いや、私が！」

「我こそは」と僕の意見を無視して女の子一同がそれぞれパートナー候補に立候補する。

「え、えっと……」

大勢の人間に誘われたことは嬉しくある。だがシャルロットからすれば誰かとペアを組むというのは非常にまずい。今後ペア同士での特訓も行うだろうし、いつどこで正体（性別と偽名）がバレてしまうとも限らないのだから…。

だが、お人好しのシャルロットには自分で断れない。シャルロットは困り果てた顔で窓際にいる箒に助けを求める。するとその異変に気付いた箒が助けるため話に割ってはいる。

「すまないがシャルロッ…いや…シャルルとは私が組む！！」

「また篠ノ之さん！確かこないだもデュノアくんと一緒にお昼食べてたよね？ちょっとデュノアくんと仲がいいからって後から出てき

て調子にのらないでよ。」

「そうだ！そうだ！順番だ！専用機持ちでもないのに…」

女の子一同は激しく反発する。しかしそれは必然。突然横入りされて納得する人間などいない。それも専用機持ちでもない箒にされたのだから腹も立つ。だがこのあと箒の一言でその場は静まり返る。

「私は…私は篠ノ之束の妹だ！！」

その場の箒とシャルロットを除き全員が驚く。

「えっ！？…嘘。もしかして、篠ノ之束ってあのＩＳ創設者にして天才の！！？」

沈黙。女の子一同はその言葉に納得したかのように蜘蛛の子を散らす。正確には箒に適わないと考えたのだろう。ＩＳ創設者の篠ノ之束の妹ともあれば専用機と同じく特別で凄い操縦技術を持っているに違いない。しかし実際は違う。学園に入学する際には必ずＣ、Ｂ、Ａ、Ｓ、と下から順にランク付けるＩＳ適性検査が行われる。

その結果、箒のＩＳランクはＣ。

ちなみにシャルロットのＩＳランクはＡ。

どちらの実力が上かは言うまでもない。

「助けてくれてありがとう、箒。いつも頼ってごめんね」

「あ、ああ、いつものことだ！気にするな。それより私とペアで良かったのか？」

箒は珍しく悪びれた態度で言葉を発する。強引に僕とペアを組むと

宣言したことに悪気を感じているのだろうか？
もし、そうだとしたらそれは大きな勘違い。僕は元々箒と組むつもりだったし、むしろ誘ってくれたことに感謝している。そんな箒に僕は自分のありのままな気持ちを伝えた。

「うん♪僕は箒がいいんだよ。それに誘ってくれて嬉しい」

シャルロットはにっこりと箒に微笑む。その笑顔に安堵し箒はほっとする。
しかし箒の心の奥底にはある疑惑が湧く。
もしかしたら私のしていることはいらぬお節介なのではないだろうか？
つい箒はそんなことを考えてしまう。今考えれば箒は少々シャルロットに過保護なところがある。それはシャルロットのいじめられていた過去にある。
昔、箒がシャルロットを助けたのは紛れもない事実。今まで箒は泣き虫で弱い彼女を助け守ってきた。だが今はどうだろうか？彼女は弱いのか？
いや…もう、決して弱くなどない。確かにお人好しのせいか強引な人の誘いを自分で断れなかったり、たまに箒に向かって弱音を吐いたりもするが昔と比べると彼女はずっと強くなった。ＩＳの操作技術に関しては自分を遥かに上回る。
果たして自分はまだ彼女にとって必要な存在なのだろうか？
箒は疑心暗鬼となり、そんな彼女に対し劣等感さえ感じてしまう。

そんな箒の気持ちをよそにシャルロットは申込書を職員室に提出しに行く。そしてここに『シャルロットと箒の幼なじみペア』が結成された。

…と思われたが停学の解けたあの3人がそれを黙って見過ごすはずがなかった。

第１８話　美女と野獣♪（前書き）

ども、ども。

最近思ったのですがこの作品ともう一つＩＳ二時創作作品を書こうかなと考えています。
もし完成してそれを読んで頂けたなら幸いです。

第18話　美女と野獣♪

◇あれからペアを組んだシャルロットと箒の2人は学年別トーナメントに向けて毎日アリーナで実戦訓練を行った。

そして1週間の時が過ぎ、ついに奴らの『停学処分』が解けた。それはまるで鎖に繋がれた獣を解き放つかのようだ。

まず始めにシャルロットと箒の目の前に颯爽と現れたのはセシリアだった。2人がペアを組んだという噂を聞いていた彼女は屋上へと2人を呼び出す。

「どういうことですの？シャルロットさん！！わたくしという愛人がおりながらCランクの箒さんなんかとペアを組むだなんて……！……どうかしていますわ！！説明して下さい！」

セシリアがシャルロットに迫る。それに困るシャルロットの変わりに箒が返答する。

「そんなものは早い者勝ちだ！そもそもお前が停学でその場にいないのが悪いんだ！」

箒が正論を述べるがセシリアがそれで納得するわけがない。

「わたくしがどんな地獄を見たかも知らずに、よくそんなことが言えますわね。いいからペアの座をわたくしに譲りなさい！」

「断る！」

「何故ですの？何故わたくし達の愛を引き裂こうとしますの！？も

しかして箒さんもシャルロットさんのことを……」

そう言いかけた瞬間セシリアの顔面にひねりを加えた箒の右ストレートが炸裂した。

「…グヘッ！」

奇声をあげたセシリアが仰向けに倒れた。

「お前と一緒にするな！この変態が！」

「殴りましたわね！もう許しませんわ！それにわたくし変態ではなくってよ。わたくしはただの同性愛者ですわ！」

「それを変態だと言っているだぁ！シャルロットに近づくな！この変態めが！」

その後2人は素手での取っ組み合いの殴り合い。

セシリアは喧嘩にＩＳを使用していないし、まあ2人とも大丈夫だろう。僕は2人の喧嘩をあえて止めない。それに昔から言うでしょ？喧嘩するほど仲がいい…ってね。僕はそんな2人を置いて教室へと戻ることにした。

教室に戻ると次にそこへ待ち受けていたのはラウラ。手に持っているのは学年別トーナメントに関する申込書。

「えっと…？」

「申込書だ！お前は私の嫁なのだからペアを組むのは当然！早く書くがいい！」

相変わらずぶっきらぼうな顔付きだがラウラは前と比べるとずいぶん好意的だ。本当はそんなラウラとペアを組んであげたい気もする。が…すでにペアが決まっている僕は意を決して断ることにした。

「あ、あのね…すごく言いにくいんだけど……もう僕はペアが決まっているんだ。だからゴメンね…」

「ほう。それはどこの誰だ？」

なんでそんなことを聞くのだろう？でも誰かを教えるぐらいはいいよね。

「えっと……同じクラスの篠ノ之　箒だよ」

「なるほど。あいつか！……少し待っていろ。息の根をとめてくる！」

「えっ？」

するとラウラは愛機シュヴァルツェア・レーゲンを展開し廊下を出て飛んでいった。停学したのにまるで反省をしていないラウラ。

（前言撤回。ラウラと組むのは色々ダメだ。そんなことより箒の身が危険だ！早く助けに行かないと…）

僕は慌ててラウラの後を急ぎ追おうとするが後ろから鈴に捕まってしまった。

「捕まえたわよ！シャルル。早くこれにサインしなさい」

鈴はペア申込書を僕に向かって手渡そうとする。でもそれどころではない。親友の命がかかっているのだから。

「ゴメン、鈴。僕急いでいるんだ！」

だが鈴は僕の腕を掴み一向に放さない。

「何を急いでるか知らないけど、わたしはサインしてくれるまで絶対に放さないから！」

鈴の意志は固そうだ。そんな鈴に僕は上目遣いでお願いする。

「お願い。急いでるの。放して欲しいな」

うるうると瞳を輝かせるシャルロット。そんな彼女に鈴は気持ちが揺らぐ。だが……これだけは譲れない。シャルロットとはクラスが違う鈴。そんな彼女は大好きなシャルロット（シャルル）とペアを組んで彼といられる時間を少しでも作りたいのだから。

「嫌っ！いいから早く書きなさいよ！そしたら放してあげる」

「ごめんね。僕はすでにペアを組んでるんだ。だから他の人を……」

シャルロットが言葉を言い終える前に鈴が激怒する。その姿は髪を逆立て、まるで化け猫のようだ。

「どこの誰よ！そいつは？何年何組？名前は？」

このままじゃラウラの二の舞になりそうだよ。こうなったら……。

チュッ

シャルロットは鈴の右頬に優しくキスをした。

「こ……これで許して欲しいな。……ダメかな？」

「な…ななな……！……！」

鈴は顔を真っ赤にして首をブンブンと縦に振る。どうやら許してくれたようだ。やっと納得してくれた鈴は僕の腕を放し解放する。

僕は急ぎ屋上へと向かう。屋上に辿り着き扉を開けるとＩＳを展開したラウラが武器を構えセシリアと箒に詰め寄っていた。

「お願い、ラウラ！止めて！」

僕は３人の間に入り込み止める。

「いくら嫁の頼みでもそれは了承しかねる。私と嫁の愛を阻むものは消す！」

ラウラの暴走は止まらない。さらに第３勢力（？）のセシリアが会話の邪魔をする。

「嫁とは聞き捨てなりませんわね！シャルロッ……ゴホン、シャルルさんは、わたくしの愛人ですわ！」

「いや、私の嫁だ！」

「いいえ、わたくしの愛人ですわ！」

２人とももっと日本語を勉強しよう。使い方を色々と間違っている。

「むむむ～」と2人は睨みあった後、声を重ねて言う。

「「決闘だ！」」

2人はＩＳを展開し空高くへと舞い上がり激しい空中戦を始める。
僕と箒は呆気にとられ、それをただただ黙って見ていた。

「お前らそこで何をしている！！？」

そこへ織斑先生が登場。それも当然だ。あんなに空中でバカスカ撃ち合ったら誰でも気づく。
この日、ＩＳ使用不可の場所でＩＳを展開し使用した2人とそれを黙って黙視していたシャルロットと箒を含む４人（シャルロット・箒・セシリア・ラウラ）が『停学処分』を言い渡された。これぞ完全なとばっちりである。道連れだ。
もちろん数日後に行われた学年別トーナメント1年の部では鈴の率いるペアが見事優勝した。理由は言うまでもなく僕ら専用機持ちが3人も参加しなかったためだ。
こうして学年別トーナメント1年の部は鈴の1人勝ちで幕を閉じた。

第１９話　今日も朝から♪（前書き）

ついに…ついに念願の総合評価１００ｐｔ突破。嬉しいです。
まだまだ未熟な文章で小説とは呼べないかもしれませんが応援よろしくお願いします。

※お知らせ。
ＩＳの二時創作をもうひと作品書きました。この作品があるので、そちらは更新が遅めですが是非時間に余裕があれば読んで下さい。

タイトルは
『ＩＳ　Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｗｏｒｌｄ』です。

第19話　今日も朝から♪

◇チュンチュン……。
朝日が昇り窓の外では目覚めをうながすかのようにスズメが鳴いている。

「んん……」

（もうすこし……もうすこしだけ……）

このまどろみ延長は至福の時である。そんな今日は休日で学園もお休み。学年別トーナメントも無事終わり、それによる安堵からかシャルロットは2度寝に入ろうとする。

ふに。

（……？）

ふにふにっ。

（何だろう？この感触は？すべすべで柔らかで心地いい。まるでマシュマロみたいだ）

…って、ちょっと待って！この感触は僕のものじゃない。

がばっ！と布団をめくり上げる。そこには全裸のラウラが寝ていた。

「ら、ら、ラウラ！な…何してるの？」

「ん……。なんだ……？もう朝か……？」

なんでラウラがこんなところに？それも全裸で…？まさか……僕が寝てる間に僕とラウラは結ばれちゃったの？

シャルロットはついそんな卑猥なことを考えてしまい頬を羞恥心から真っ赤にする。

「心配するな？私は寝ているお前を襲うような真似はしない。……む、むしろ私の方が寝ているお前に色々と触られてしまったがな」

そう言うとラウラは頬を染め普段は見せぬような女の子特有の恥じらいを見せる。

（何があったの？僕が寝ている間に一体何があったの～～？）

僕は寝起き早々に頭を抱え悩まされる。だがそんなことより……。

「とにかく服を着てよ」

「おかしな事を言う。夫婦とは包み隠さぬものだ。それに日本ではこういうお起し方が一般的と聞いている。将来結ばれる者同士の定番だとな」

「ま、間違ってるから…その知識！いいから服着てよ」

いくら女の子同士といえども裸は恥ずかしい。僕は換えの服をラウラに手渡す。ラウラは服を受け取るとクンクンとその服の匂いを嗅ぎだした。

「や、やめてよ！そんな変態さんみたいなこと」

「……す、すまない。つい嫁の匂いを確認したくなってな。今度は直接嗅がせてくれないか？」

ラウラが僕にみるみるうちに近づく。そのままベッドに僕の身体を押し倒し直に匂いを嗅ぎだした。もしかしてラウラもセシリアと同じくそっち系？

いや違う。…ラウラは僕のことを男の子だと思っているワケだから、むしろノーマルなんだけど。

「んん……ひぁん……やっ……ダメそこ……んっ……あん……」

つい変な声があがってしまう。ラウラが何をしているかと言うと僕の首筋の匂いをクンクンと嗅いでいる。そのたびにラウラの鼻息があたりくすぐったい。ギシギシと軋むベッドの音で隣に寝ていた箒が目が覚ます。

「き…貴様は朝から一体そこで何をしている？」

「朝の夫婦の営みだ。お前こそ、それを邪魔をするとは無粋な奴だな！常識というものがないのか？」

「お前に常識をとやかく言われる筋合いはないわ！それにここは私の部屋でもある！いいから早く出ていけ！」

箒は日本刀を鞘から抜き構える。ラウラは立ち上がりふんぞり返って腕を組む。しかも裸で。

「フンッ！羨ましいのだろう？私と嫁がイチャつくことが。まあ貴様では真似できまいからな」

「べ…別に羨ましくなどないわ！」

箒が怒り日本刀を縦に振り落とす。それを避ける。するとベッドが瞬く間に一刀両断された。それに対しラウラがどこからかサバイバルナイフを抜きとり戦闘体勢に入る。そんな2人を見かねた僕が止めに入る。

「ちょっと待ってよ。2人とも止めて！！そんなの振り回して当たったら死んじゃうよ！」

「死ねばいいんだ！私と嫁の甘い一時を壊す輩など死ねばいい！」

ケロッとした顔でラウラが答える。その顔にはまるで悪びれもなく本音にしか聞こえないから怖い。いや、間違いなく本音だ。…というよりラウラの言い分はむちゃくちゃだよ。

「貴様ぁ～言わしておけば！そもそもシャルロ……シャルルは私の親友だ！」

ガキンッ！キンッ！

箒が刀を振り回す。それをラウラがナイフで受け止めお互いの刃が重なり合う。両者凄い剣さばきで、どちらも達人にひけを取らない腕前だ。

「やるな！」

「貴様こそ！」

正直朝っぱらから刃物を振り回すのは止めてほしい。さっきも言ったけど普通に当たったら死んじゃうし危ないよ。この2人に常識はないのだろうか？

そんな朝のドタバタも終わり時間はすでにお昼前。僕、箒、ラウラ、は朝昼兼用の食事を取ることになった。相変わらず2人はあまり仲がよくない様子。先ほどの件は織斑先生がやって来て止められたから収拾がついたものの次喧嘩になれば僕だけでは止められないだろう。それにしてもまた『停学処分』にならなくて良かったよ。ホントに。まあ、ＩＳの使用禁止にうるさくて日本刀やナイフの使用が許されるというのも些か疑問ではあるけどね。

そんなこんなで僕らはメニューを決めて席につく。ちなみにメニューは僕がカルボナーラ、箒がサバ味噌煮定食、ラウラがシュニッツェルをチョイスした。

「ラウラ、それおいしい？」

「ああ、食べるか？」

「わあ、いいの？」

「うむ」

そう言うとラウラは皿に盛られたドイツ料理のシュニッツェルを小皿に一切れ切り分け僕に差し出す。シャルロットはそれを頬ばって幸せそうな笑みを見せる。

「ん～！凄くおいしいね。ドイツってお肉料理がどれもおいしくていいよね」

「ま、まあな。ジャガイモ料理もおすすめだぞ」

自国のことを褒められて嬉しいのか、ラウラの顔は少し赤い。それを見ていた箒が負けじと日本料理であるサバの味噌煮を僕に勧める。

「シャルル。これも食べろ！美味いぞ！」

僕はまだシュニッツェルを口に頬張っているから喋れない。そんな僕の口内に有無も言わせず箒がサバの味噌煮をねじ込んでくる。

「ん～～ん～～」

（苦しい。…喉につまっちゃった）

その苦しむ様を見てラウラが水の入ったコップを僕に手渡す。それを一気にゴクゴクと飲み干す。

「はあ…はあ…。突然何するんだよ、箒！！喉につまったじゃないか！」

「すまない…つい」

そんな箒にシャルロットが怒ると彼女はシュンとした。

だいたい「つい」って何だろう？つい僕を窒息死させる気だったのだろうか？いや…箒に限ってそれはないよね。じゃあ、何故ラウラ

と張り合うようなことをしたのだろう？

（何故だ？何故ラウラとばかり仲がいいんだ！私の方が幼なじみで付き合いが長いはずだろう。だったら私にだけ、なついていれば良いではないか！！）

そんな箒が心に秘めるヤキモチをシャルロットは知るよしもなかった。

このあと昼食を終えた彼女達3人は学園から外出し買い物へと向かった。

第２０話　勘違い♪（前書き）

やった～。
ＰＶ３００００突破しました。少ないとか言わないでね（泣）
これでも頑張っているのです。
そう言えば、ついにこれで２０話目ですね。そろそろ何か番外編でもやろうかな。え？ダメ？

第２０話　勘違い♪

◇突然ですが、もし大事な友達がそっち系（ホモ・レズ）で自分のことを好きだとしたらどうしますか？

今回は小さな勘違いから産まれたそんなお話です。

――――３人が買い物に向かった先は駅前にあるショッピングモール。以前にも説明したが、ここでは多種多様で様々なものが売られている。そんな場所に彼女達が訪れた理由とは『水着』を購入するためである。

それはもうすぐ始まるという臨海学校に備えての準備ということだ。その臨海学校には自由時間が設けられており、その自由時間の際には海を自由に泳ぐことが許される。

そこでシャルロットが何故か２人に似合う水着を見繕うことになってしまったのだが……。

「ねえ、ラウラ。これなんかどうかな…？」

僕がラウラに選んだものは黒の水着。それもレースをふんだんにあしらったもので、一見するとそれは大人の下着（セクシー・ランジェリー）にも見える。

「お…お…お前が選んでくれたものなら私はなんだって構わないぞ。……しかし意外に大胆なモノを選ぶのだな！」

ラウラは恥ずかしそうに頬を赤らめ顔を俯かせる。きっと、その大胆な水着を自分が纏い泳いでいる姿でも想像してしまったのだろう。そんな可愛らしいラウラを見ているとシャルロットはどこか胸がキュンとしてしまう。

つい僕は勢いでラウラをギュッと抱きしめる。

「な、何をする！？」

「だってラウラ可愛いんだもん♪」

そのまま僕はラウラの頬にスリスリと頬ずりをする。

（えへへ。ラウラのほっぺたプニプニで柔らか～い）

「…離せ！こんなところで！ほ…他の者が見ているだろう！」

その言葉を発したラウラはいつもと違いどこか弱々しい。嬉しくあるが人前では恥ずかしい。

だがそんなラウラの気持ちなど微塵も知らないシャルロットは彼女に抱きついたまま激しく頬ずりを続ける。

なんとか無理やり自分の身体から遠ざけようと突き放す。……が抱きついたままうまく離れない。

今朝とは打って変わって恥じらうラウラとそんな姿に愛らしさを感じ抱きつくシャルロット。

今朝とは違い、２人の立場がまったく逆転したようだ。

「そろそろ、止めてやれ！」

ずっとそれを見ていた箒がシャルロットの首根っこを掴みラウラから強引に引っ剥がす。だが箒は別にラウラが困っていたから助けた訳ではない。内心ただ２人の仲よさげな姿が気にいらない。

ただそれだけだ。

しかしその心情は恋愛感情から生まれるそれとは異なる。

例えるなら突然、可愛がっていた娘を男にとられた父親のような気分だ。
要するに「どこの馬の骨かもわからないような奴に娘はやらんぞ！」っといったところだろう。

「ラウラのことはいいから次は私の水着を選んでくれ！」

胸の辺りで腕を組み箒が偉そうにシャルロットへそう告げる。

「うん♪いいよ」

するとシャルロットはテンション高めに了承する。やはり彼女も女の子なのだろう。普段は男のフリをしてはいるが中身は十代乙女、女物の洋服や水着を見るとついテンションが上がってしまう。
そんなテンション高めな彼女は多々ある水着の中から箒に似合いそうなものを選んでいる最中だ。

「おい、貴様。少し2人で話がある！ツラを貸せ！嫁にはバレぬようにな」

珍しくラウラが箒に話しかけた。それも小声でだ。シャルロットが水着を選ぶ隙を伺って2人は気づかれぬように水着売り場からコッソリと抜け出す。

「いったい私に何のようだというんだ！」

（まさか今朝のように私を殺すとか言い出すのではないだろうな？）

箒の心中ではそんな疑惑ばかりが募り、すぐに戦闘体制に入れるようについ身構えてしまう。しかし箒の予想した言葉や態度とは大き

く違った。

「単刀直入に聞く。貴様と嫁はどういった関係なんだ！？それと嫁をどう思っているんだ！？」

「……えっ？」

箒は固まる。

どう思っているか？と聞かれても友達、もしくは親友としか答えられないのだが……。

そうか！

ラウラがシャルロットに好意を寄せているのは知っていたがすっかり忘れていた。

そういえばラウラはシャルロットの秘密を知らないのだったな。知っているのは本人含め私と変態（セシリア）だけだ。

つまり未だにラウラはシャルロットを『男』と思っている。

だが、なんと答えればよいのだ！？

奴のことだ！もし友達、もしくは親友だと答えるものならラウラの性格を考えて『友達程度の間柄でこれ以上嫁に近づくな』などといった言葉が返ってきて挙げ句の果てに襲いかかって来ても不思議ではない。

いっそのことシャルロットの秘密を全て話してしまった方が楽なのだがな。

しかしこれ以上シャルロットの秘密がバレるわけにはいかないだろう。そもそも親友の秘密を易々と話すわけにはいかない。それにもしバレれば国際問題に発展する程のようなことだ。ならば奴がシャルロットを諦めるように仕向ければ良いのではないか？

そうだ！そうしよう。

『私とシャルロットはすでに付き合っている』ということにすれば奴もシャルロットを諦めて2度と付きまとわないはずだ。

うむ…これはシャルロットの秘密を守る為でもあるんだ。ラウラに付け回されて秘密が露顕するとも限らないのだからな。

それに嘘も方便だと言うではないか！

決してシャルロットを独占したいとか私のヤキモチからではないぞ。

箒は意を決してラウラに向かって言う。

「じ、実は私とシャルルは付き合っている！！……つ…つまりだな。私は……私はシャルルを愛しているんだ！」

ドサッ！！！

カバンを落とす音。

それは箒とラウラを捜して偶然そこへ居合わせてしまったシャルロットのものだった。

一瞬シャルロットの思考は停止した。

そしてハッと我にかえる。

———あ、あれ？何がいったいどうなってるの？

箒が…箒が僕のことを好き？夢か幻だよね？

だって箒は僕のことを幼い頃から知ってるんだよ。もちろん女の子だと知ってるワケで……。

そんな中、つい僕は以前セシリアに言われたあの言葉を思い出す。

『恋愛に国境も性別も関係ありませんわ』

ダラダラと身体中に冷や汗が出るシャルロット。
この間わずか6秒。そして悩みに悩んだ結果シャルロットはある結論に至った。『箒はレズ！！』

その衝撃の真実（違う）にショックを受けたシャルロットはしばらく放心状態。脳裏には箒の「愛している」という言葉だけが響く。
そんなシャルロットに箒が話しかける。

「……あのだな、シャルロット。い、今のは全部誤解なんだ！ちゃんと話を聞いてくれ」

そう言いながら箒がだんだんと距離をつめる。だが今のシャルロットには全てが逆効果だ。勘違いしているのだから。

「近づかないで！わかってる。箒の気持ちはわかってるから。で、でも僕は箒の気持ちに答えられないよ。だって……だって僕はノーマルだから……」

余程ショックだったのか、そう言い終えたシャルロットは『うわああああああああああああああああん』と1人泣き叫びながらどこか遠くへと走り去ってしまう。固まる箒とラウラの2人。

「…って、ちょっと待て。誤解だあああああああああああ。私はアブノーマルでもなければレズでもないぞ！頼む、待ってくれ！！私はレズではな――――――――――い！」

箒はシャルロットの後を急ぎ追いかける。その箒の後をナイフ片手にラウラが追う。

「貴様あああああああああああ！よくも私に嘘をついた挙げ句か私の嫁を泣かせたな！その罪は万死に値する。死んで償え！！」

彼女達の『恋？』という名の勘違い（誤解）は続く。果たして終わりはあるのだろうか？

第２１話　王様ゲーム　前編♪（前書き）

すいません。
投稿スピード落ちてます。でも何故かお気に入り登録が増えてテンションＵＰ。
え～。今回のお話を一言で説明しますと物語から大きく脱線したって感じです。
っていうか、脱線事故って感じです（笑）　。
まあ、楽しんで読んでいただけたら幸いです。

あと感想、ダメ出し、意見、受付中です。

第２１話　王様ゲーム　前編♪

◇あの後、箒は？あの言葉？に至るまでの経緯をシャルロットに細かく説明した。
その必死な弁解もあってシャルロットの？箒はレズ？という誤解はなんとか無事に解けた。
そして２人は今まで通りの関係へと戻った。口には出さないが箒は誤解が解け内心かなりホッとしたという。やはり親しい友人に変な目で見られるということは耐え難い苦痛だったのだろう。

そんな今日はＩＳ学園ビッグイベントの１つと言われる？臨海学校？初日。
さっそく荷物の支度を済ませた生徒一同は学園の正門前へと集められていた。
目的地へは各クラスごとに別れバスで向かうのが決定事項。準備の整った生徒一同は各バスへ荷物と共に乗り込んでいく。その中にはいつものメンバーの姿も見られた。
そのいつものメンバーとはシャルロット、箒、セシリア、ラウラの４人である。ちなみに鈴は２組だからこのバスには乗っていない。

そう。？はず？だった。

――数分後。
１組の生徒全員が乗車するとバスが出発した。
出発するや否や生徒一同はさっそくバカ騒ぎ（ガールズトーク）を始めていた。これも若さ故の特権と言えるだろう。
あと、肝心な座席位置を説明しておくと一番後ろの席にラウラ、セ

シリア、シャルロット、箒の横一線で４人が座っている。これを決めるのにはかなり時間がかかったという。何故ならみんなシャルロット（シャルル）の隣がいいと言い出すのだから。奇しくもシャルロットの隣になれなかったラウラには不満だけが残る。

「ねえ、皆さん。せっかくですのでゲームでもしませんこと？」

珍しくセシリアが盛り上がる良い提案を思いつきみんなに切り出した。

「うん、いいね。なんだか楽しそうで」

「たまには変態（セシリア）もまともな事を言うではないか！」

「うむ、嫁がやるなら私もやるぞ！」

シャルロット、箒、ラウラ、と続き皆それに賛成する。

「で？そのゲームとやらはいったい何をやるんだ？」

先程までシャルロットの隣には座れず超不機嫌だったラウラだが興味あり気にゲーム内容をセシリアに問う。

「それは勿論日本で代々伝わるという？王様ゲーム？ですわ。まあ、わたくしも正確にはやったことがないので詳しくは知らないのですけれどね……（嘘）」

「却下だ！どうせ変な事でも考えているのだろう？」

「僕もそれはちょっと……ね」

箒が？王様ゲーム？に反対する。それは勿論シャルロットの身を案じてのことだ。シャルロットも何となく嫌な気がしたので反対派につく。
だがセシリアはそんな言葉などものともしない。隣のラウラにそっと何かを耳打ちした後ニヤリと不適な笑みを見せ話を続ける。
「あら、何をおっしゃっているのかしら？わたくしには皆目見当もつきませんわ。では多数決を取りましょう。？王様ゲーム？をしたい方は挙手を！」
手を挙げたのはセシリアと……何故かラウラだ。
「クッ……何故ラウラが！？だが私とシャルロットは挙げていないから多数決の結果は2対2で引き分だ！…ということで他のゲームに――――」
箒が仕切り直そうとした。そんなとき聞き覚えのある声がそれを遮った。
「ちょっと待った！！」
4人がその声のする方を見るとツインテールの女の子が1人立っていた。それは2組のバスに乗車したはずの鈴だった。
「わたしも参加するから！それと私も？王様ゲーム？に1票ね」
皆は驚く。それもそのはず。思っていることも同じだった。
「「「なんで鈴がここに？」」」

驚きのあまりセシリア除く3人の声がハモった。
ちなみに『ハモる』とは『ハーモニー』からきた語源らしい。
「うるさいわね！こっそり忍び込んだのよ。何か文句ある？それより早く始めるわよ。？王様ゲーム？」
突然現れやる気満々な鈴。そんな鈴を見て少々シャルロットは呆れた。

（こっそり忍び込んだって……ダメでしょ。そもそも織斑先生にバレなかったのかな？）

？他クラスのバスに忍び込んだ？なんてことがＩＳ学園の鬼こと織斑千冬にバレたら叱られてしまう。優しいシャルロットは鈴の身を案じて千冬の座る車両の最前列に目をやる。…が身体をこっくりこっくりと揺らしている。どうやら眠っているようだ。

（だけどもし起きれば鈴が大変なことになる。大丈夫かな？）

そんなシャルロットの心配をよそにゲームはすでに始まろうとしていた。

何故かって？
それは鈴の加入により多数決の結果が3対2になったためだ。シャルロットはどちらかというと参加したくない。しかし雰囲気的にも断れる状況ではない。シャルロットは箒に目をやるが断る気配は無さそうだ。さすがの箒もこんな場面では断れないらしい。

理由は簡単。多数決とはいえ皆で決めたことだし抜けるだなんて言ったら、せっかくの楽しい雰囲気に水を差してしまうからだ。

だがこれは初めから全て仕組まれたものだった。

そう、首謀者は変態ことセシリア・オルコット。彼女はこの?王様ゲーム?をやるためだけに全てを仕組んでいた。

まず初めに彼女は乗車するや否や教諭である千冬を強力な睡眠薬で眠らせた。これで鈴加入のスタンバイもＯＫ。

その後、何事もないように座席に座り?王様ゲーム?を提案。さらに箒に反対されることもすでに予想がついていた。

しかし抜かりはない。彼女は考えた。多数決に持って行けばいい。皆で決めたことなら文句も言えまい。

そう考えた彼女は計画企画中に鈴を、バス内でラウラを仲間に引き入れた。

２人には王様になれば「シャルルに好きな命令を下せる」とでも吹き込んでおいたのであろう。

実際、セシリアの目的もそれだった。

けれども２人とは決定的に違うものがある。それはシャルル（シャルロット）が?女の子?であり?偽名?だと言うことを知っているということ。

そしてもう１つが重要。彼女が?超?がつくほどの変態だということ。今彼女の脳内ではもし王様になったらシャルロットにどんな恥ずかしい命令を下すかでいっぱいだ。

（ああ～、いいですわ。

ゲームとはいえ、ついにシャルロットさんをわたくしのものにできるだなんて。もし命令を下すならまずシャルロットさんと○○○を。

いや×××をしてもらうとか。△△△も捨てがたいですわね。いっそのこと―――）

セシリアの脳内では口で言えないピンクな妄想が広がる。

※注意。

彼女は王様ゲームの主旨を色々と間違っています。っというか一線を超えています。

こうして始まったセシリア主催の？王様ゲーム？。

果たしてシャルロットの運命はいかに……。

第２２話　王様ゲーム　中編♪（前書き）

すいません。
前回、変なところで引っ張りました。
でも、今回もあえて引っ張ります（笑）
そういえば最近アクセスしてくださる方が増えました。
ただし投稿した日に限る。
でも正直本当に嬉しいです。俺の作品を見てくれる人がいると思うだけで。
まあ、読んだはいいがお気に召さない人は多いみたいですが（泣）
このまま細々と頑張ります。

第２２話　王様ゲーム　中編♪

◇『王様ゲーム』
それは自分以外の人間をどれだけ恥ずかしめ陥れ楽しむかという？魔のゲーム？。

参加者は通常５～１０人程度の男性・女性の２グループが一緒になって行うもの。だが今回は女の子５人で行うものとする。

『ゲームを行う際の準備物』
それは？クジ？だ。今回クジには？割り箸？を使用する。まず割り箸の一方の端に参加者の数と等しくうち１つには『王様』もしくはそれとわかる目印をつける。残りのクジには１から始まる連番の数字が書き込まれる。クジを配布する際には当然ながら文字が見えないようにしなければならない。

『ゲームのルールと進行方法』
典型的な形式では以下の手順の繰り返しでゲームが進行される。始めに参加者が各自クジを引く。そのとき先程も説明したが自分の番号を他人に知られてはならない。次に全参加者の「王様だ～れだ」の掛け声に合わせ王様クジを引いたものが名乗りでる。名乗りでた王様には命令が下せる。

例：「○番が×××をする」や「○番と○番が×××をする」。

指名された番号の人は名乗り出て速やかにその命令内容を忠実に実行する。その後クジを回収し再びクジを引き直す。それを永遠に繰り返し行う。

以上説明終了。

――そしてついにセシリア主催の？王様ゲーム？の幕が切って落とされた。

まっそく順番に各自クジを引く。クジを引き終えた5人の声が重なる。

「「「「「「王様だ～れだ！」」」」」」

ゲームなのに全員の表情は真剣そのもの。何故ならこのクジが全ての運命を左右するのだから。

果たして名乗りを上げる勝者とは……？

「私だ！」

なんと1回目に王様クジを引いたのは箒だった。セシリアは「チッ」と舌打ちをする。他の鈴とラウラも残念がる。シャルロットは安心感からホッと安堵する。

「なんだ、私が？王様？だと不満だというのか？」

箒は敏感に皆の態度に気づいた。何故なら事実快く思うものはシャルロットを除きいないのだから。

「いえいえ、そんなことはないですわよ。さあさあ、命令をどうぞ、？王様？」

セシリアは箒に対してうわべだけの言葉を並べておく。
とりあえず彼女（箒）を怒らせれば面倒なことになることを知っているからだ。
まあ、箒の機嫌を損ねたのには変わらないわけなのだが……。
眉間にシワを寄せ不機嫌そうな箒が皆に命じる。

「1番が3番に？膝枕？だ！」

箒を除く全員が一斉にクジを確認する。
結果、1番はシャルロット。3番はラウラだった。？王様？に命じられたことは速やかに絶対実行しなければならない。シャルロットは自分の膝の上をポンポンと叩く。

「おいで、ラウラ」

「……う、うむ」

ラウラの頬は赤く染まる。想い人に膝枕をしてもらうわけなのだから当然と言えば当然だ。ちなみに何度も説明してはいるが本人含む、箒、セシリア以外はシャルロットが本当は？女？だということを知らない。そんなラウラがシャルロットの膝を借りゴロリと横たわる。その表情はなんとも満足気で気持ち良さそうだ。

（心地いい！？嫁？の膝はなんてフカフカで柔らかいんだ！。これはもしや？兵器？なのか？我がドイツ軍も真っ青な兵器だな――――）

（えへへ、ラウラって猫みたいで可愛いなあ～～♪）

シャルロットも満更でもないらしく自分の膝を枕にして横たわるラウラの頭を撫でる。
それを羨ましそうにセシリア&鈴が見つめる。それも嫉妬、妬み、ヤキモチ、オーラが全開である。

「もう良いですわよね？ラウラさん。その膝は本来わたくしのものですわ。早くおどきなさい！」

「そうよ！早くどきなさいよ！それにラウラばっかりズルい。シャルル、あとでわたしにも膝枕しなさいよね！」

セシリア&鈴は言いたい放題。しかしゲームの結果なのだから仕方ないのだ。シャルロットもそれには困り顔を見せる。それに見かねた箒がクジを配りゲームを再び進行させた。

「「「「「王様だ～れだ？」」」」」

次に王様クジを引いたのは先程至福の時間を味わった？ラウラ？だった。膝枕の余韻からかまだ彼女の頬はほのかに赤い。

「うむ。では、私が命ずるぞ！2番と4番で？王様ゲーム？の定番とやらの？ポッキーゲーム？をやってくれ！――――」

『ポッキーゲーム』。それはポッキーと呼ばれるお菓子の両端を2人同時に食べ進めるというゲーム。上手くいけば？キス？もありえるという男女の2人で行えばとてもおいしいゲームだ。何故ラウラがそれを知っているかは些か疑問ではあるが命令は絶対である。

ちなみに2番と4番は箒とセシリアだった。それには2人とも眉をひきつらせピクピクとさせている。そして思うことは2人とも同じだった。

（（何故こんな奴と…））

そもそもセシリアの計画には大きなミスがあった。それには本人もとっくに気付いている。
それが何かというとクジに?小細工?もとい?仕込み?を忘れていたことだ。それは致命的だった。

元々セシリアの目的はシャルロットに口では言えないような○○○とか×××とか△△△をさせること。

しかしそれはクジを思うがままに引き当てることが大前提。それができない彼女にはもはや?運?に頼るしかないのだ。
そんな彼女の今日の?運?は最悪だった。犬猿の仲である?箒?とポッキーゲームをしなければならないのだから。だが立場からすると箒も同じだ。

（そもそも何故、私がこんな変態（セシリア）なんかとポッキーゲームをせにゃならんのだ！）

彼女達2人はただただ願った。ポッキーが折れて?キス?だけは回避できますようにと。

ついに始まる?ポッキーゲーム?。2人は互いに1つのポッキーの両端をくわえた。次の瞬間、ポッキーをポリポリと食べ始める。それにつれて2人の?顔?。否…?唇?が近づいていく。

パキ…パキ…パキ……。

ポッキーの折れる音だけが響く。

（くっ！変態（セシリア）の顔が近い。そろそろ回避を……）

（箒さんって近くで見ると結構お綺麗ですわね。まあ、黙っていればですけれど。それにシャルロットさんの魅力に比べれば水洗便所とボットン便所並みの差ですわね――）

互いの思惑を胸に……。ついに運命の別れ道は訪れた。

すでにポッキーはギリギリのところだった。すでに互いの唇が当たるか否か。そんなギリギリのところで2人は回避しようと後方へと身体を仰け反る。それにより回避は見事成功。？キス？は免れた。

（はあはあ、危なかった。こんな寿命の縮むゲームは2度とごめんだ！）

（あ、危なかったですわ。シャルロットさんという？愛人？がおりながら危うく箒さんと口づけを交わすところでしたわ……）

箒、セシリア共に深く安堵する。

それもそのはずもう少しで？禁断の行為？を行うところだったのだから。

（ただしセシリアはシャルロットとならＯＫ）

それにはシャルロットもホッとしたという。幼なじみで親友である？箒？のそんな姿など見たい訳がない。

しかし、そんなシャルロットの安心も束の間に過ぎなかった。何故

なら？王様ゲーム？の恐ろしさはこれからなのだから。あえて次回話に続く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6415w/

IS シャルロットにおまかせ♪

2011年10月11日09時56分発行